



硫黄島いおうとう

年代記

クロニクル

島民の運命さだめ

全国硫黄島島民の会

硫黄島

年代記

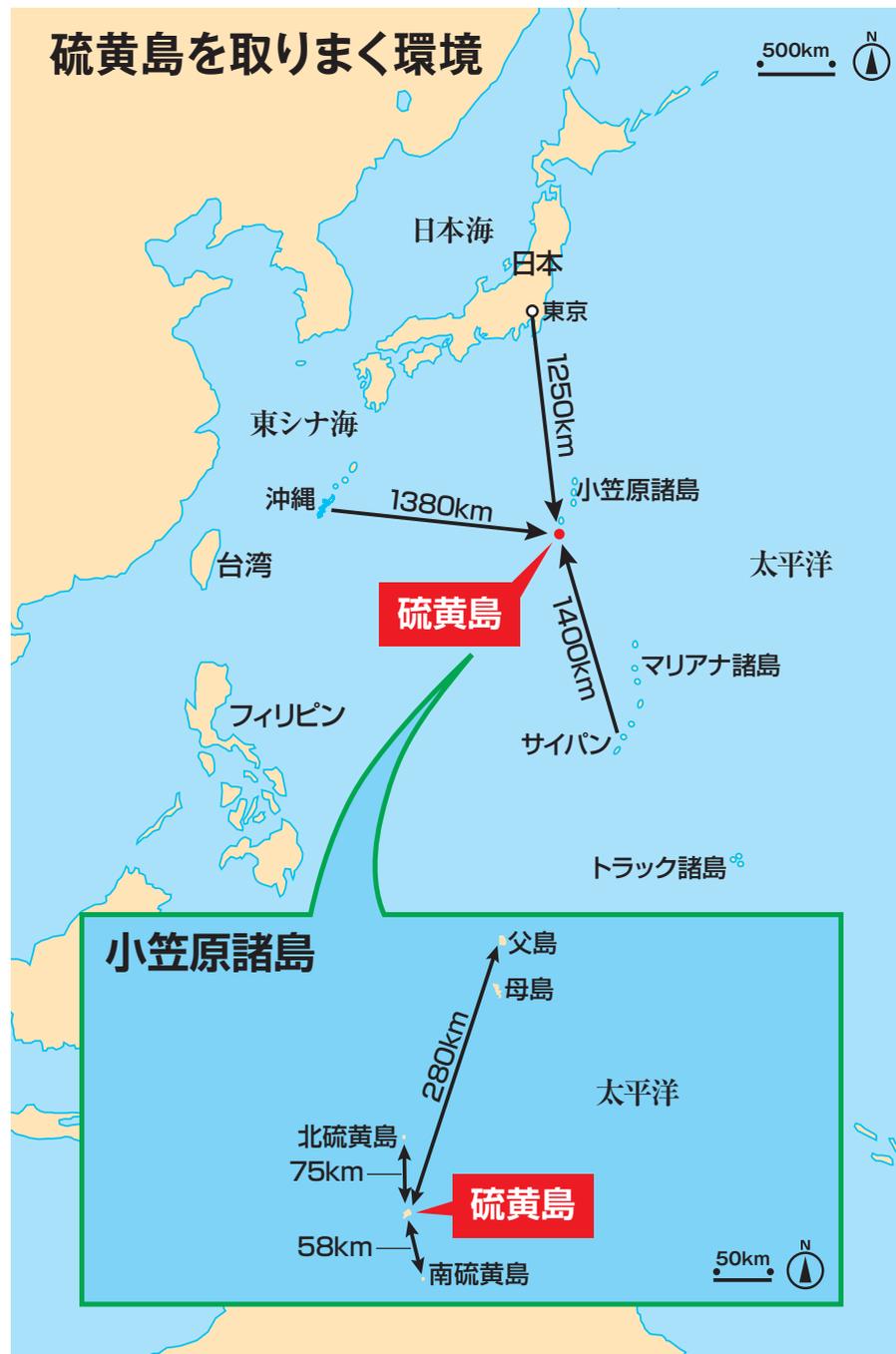
クロニクル

島民の運命

全国硫黄島島民の会

目次

05	硫黄島を取りまく環境
06	1944 (昭和19)年の硫黄島のようす
08	第1章 開拓期
12	第2章 産業
18	第3章 島民の暮らし・風俗
58	第4章 戦火・地上戦
66	第5章 島民と戦争
74	第6章 終戦・返還
76	第7章 硫黄島の現状
86	第8章 硫黄島の未来
88	硫黄島歴史年表
92	発刊に寄せて
93	謝辞
94	主要参考文献・資料



1944(昭和19)年の 硫黄島のようす



開拓期

東京都心から南へ約1,250km。
太平洋に浮かぶ硫黄島とは



西海岸沖から硫黄島を望む。右側に見えるのが硫黄島のシンボルでもある摺鉢山

東京都にある硫黄島 その位置と気候

硫黄列島とは、太平洋上の北緯24度10～30分の間、南北に点在する北硫黄島、硫黄島、南硫黄島の3つの島からなる火山列島。3島の中心にあり、最も大きな面積を持つ硫黄島(別名:中硫黄島)は、東京から南へ約1,250km、小笠原諸島の父島

からは南へ約280kmに位置する。

位置的にはいわゆる亜熱帯に属するが、海流などの影響で海洋性気候である。年間平均気温は24℃。1日の気温差は大きい時で6～7℃。最高気温が40℃近い日もあり、6月中旬～10月上旬までは30℃を越える日が多く、1年の中で最も寒いといわれる2月でも最低気温は12℃程度。

降水量は、夏期は短時間で多量の降水量があるスコールが多く、冬期は夏期に

比べて少なく、6～11月(6か月間)の降水量は、12～翌年5月の降水量の約2倍程度。年間降水量は、平均値で約1,200mm。

冬は、北東から北西の風が吹き、春から夏にかけては東から南の風が吹く。年間を通じた平均風速は6m/秒程度。例年、硫黄島周辺(300海里以内)を通過する台風は年間5～10個程度で、東または南東から接近し、西に抜けるのが通例。

火山活動が生んだ 硫黄島の地形、地質

硫黄列島は富士・伊豆南方諸島火山系に属し、南硫黄島、北硫黄島には噴火の記録は見られないが、硫黄島は発見以来、火山活動が継続している。

1986(昭和61)年には、南硫黄島の北東沖で海底火山が噴火。新島が誕生し、その後の波浪により消滅した。2015(平成27)年にも、小規模噴火や火山性微動、噴煙が観測されていて、現在でも気象庁によって火山活動が監視されている。

硫黄島には北東部の元山と南西部の摺鉢山の2つの火山があり、この2つの火山を発達した海岸砂丘の千鳥が原が見つないで島を形成している。面積は約24平方km(2014年10月現在)で、東京都北区とほぼ同じ。島の周囲は約22km、北東～南西の長さは約8.3km。千鳥が浜の南部、摺鉢山の麓が最も狭く、西海岸と南海岸に挟まれた距離は約800m。

火山活動が続く硫黄島では、現在でも隆起活動が続いており、場所によっては年に1～2mも隆起する場合もある。その



↑2013年に撮影した西海岸のコンクリート船。隆起のため、現在はほぼ陸上にある
←北部元山、北海岸、またサトウキビ畑などに、海底の隆起を示すサンゴ礁や凝灰岩のテーブル岩が点在していた

ため、島の周囲には海岸段丘が発達し、特に島北部の漂流木海岸から為八海岸、温泉浜、箱庭浜にかけて見事な段丘が見られる。ほかにも戦前、サボテン岩と呼ばれる離水サンゴ礁が、標高114mの陸上に残っていたという記録がある。摺鉢山が段丘状になっていることから、摺鉢山の噴火口も海底でできたものと考えられる。

また、戦前、東京からの定期船は硫黄島と釜岩の間に錨泊したが、返還頃から釜岩は隆起してきた砂州で硫黄島と繋がり、現在では島の一部となっている。

終戦後、米軍が何艘ものコンクリート船を千鳥が浜に沈め、港のない硫黄島での棧橋を作ろうとしたものの、隆起スピードが速いため断念。そのまま放置されたコンクリート船は、現在では丸ごと陸に取り込まれてしまっているものも多い。

硫黄島発見。日本領土になり本格的に開拓が始まるまで

諸外国に目撃されるも「国」に所属しない時代

硫黄島は1543年、スペインの東洋艦隊に属する戦艦、サン・ファン・デ・レトラン号（船長ベルナルド・デ・ラ・トーレ）によって発見された。この時、硫黄島はLos Volcanes（火山の意）と命名されている。その後も、オランダ、スペインの艦隊が何度か、硫黄島とその火山活動について、母国に報告を出している。

1779年には、イギリスのジェームス・クック船長の第3次探検船、レズリュション号とディスカバリ号によって目撃

された。

この時、北硫黄島、硫黄島、南硫黄島はそれぞれNorth Island（ノース・アイランド＝北島）、Sulfur Island（サルファー・アイランド＝硫黄島）、South Island（サウス・アイランド＝南島の意）と名付けられた。このサルファー・アイランドという名前は、摺鉢山の山頂から水蒸気などが立ち昇り、周囲に強い硫黄の臭いを感じられたためである。

いずれの国も母国から遠く離れた硫黄列島に利用価値を見いだせなかったためか、領有権を主張することはなく、その後も硫黄列島は無住民、どの国にも所属しない島として放置されていた。



摺鉢山の山頂から上がる水蒸気と硫黄の臭気によって、サルファー・アイランドと命名された



今も火山活動の続く摺鉢山、硫黄が丘などで硫黄が採取できることから、硫黄島への入植が始まった。写真は硫黄が丘



採掘調査の結果、硫黄島で採れる硫黄は純度が高く、良質であると判明。黄色い硫黄華の製品化から硫黄島の産業が始まった

1891(明治24)年、硫黄列島が日本領土に

江戸時代が終わり、明治時代に入ると、日本は欧米列強に対抗するべく、近代化を積極的に進めていく。1887(明治20)年11月、東京府知事の高崎五六の率いる南洋視察団が、灯台巡視船・明治丸で伊豆諸島、小笠原諸島を巡航。この時、硫黄島、北硫黄島、南硫黄島でも探査が行われた。

1889(明治22)年には漁業、硫黄採掘試験を目的に、父島の船大工だった田中栄二郎ら数名が硫黄島に渡航。初の入植者となる。

1891(明治24)年9月、日本政府は勅令によって硫黄列島の領有を宣言。東京府小笠原島庁の管轄下に編入された。この時、北硫黄島、硫黄島、南硫黄島という現在に繋がる名前も決められた。

そして1892(明治25)年から硫黄島で硫黄採掘を目的とした本格的な開拓が始

まり、1898(明治31)年には北硫黄島の開拓も開始された。ただし、南硫黄島は島の周囲がほぼ急斜面になっているため上陸することが難しく、漂流者を除いて生活をする者はいなかった。



開拓初期に建てられた家(コック場)の様子。屋根と壁には、自生していたタコの木の葉を乾燥させて使った。コック場とは料理専用の建物。入り口前には水がめがある



入植後、次第に住環境が整っていき、各家庭に専用の貯水タンクが備わっていく。写真右手前のタンクへ母屋の屋根などから樋が伸びている。硫黄島では水の確保は死活問題だった

One Point解説

古代には人が住んでいた!?

日本の領土となる以前、硫黄島は無人口島で、定住者はなかった。ただし、考古学者の田野勇が北硫黄島から出土した石斧を分析したところ、日本本土の縄文、弥生時代のものに類例がなく、南方のマリアナ系統と推察されると報告している。

硫黄島から石斧が出土したという報告はないが、硫黄島と北硫黄島の距離(約75km)を考えると、行き来は可能であり、硫黄島にも古代、人が住んでいた可能性があるかと推察できる。

硫黄島の地名は誰がつけた?

1891(明治24)年、日本政府が硫黄列島の領有を宣言した際、硫黄列島3島の名前も定められた。では、硫黄島内の地名は誰が命名したのだろうか。1つの説として『小笠原諸島歴史日記 上巻』(辻友衛)によると、1889(明治22)年12月、「父島の荒井義邦が人夫10名を伴い「南洋丸」で硫黄島に渡航し経営の端緒を開く。此時同行した(小笠原)島庁吏員中野博文が硫黄島の各地に地名を付ける」とある。小笠原島庁の公標が硫黄島に建つのは、それから約2年後、1891(明治24)年11月だった。

産業

硫黄採掘から始まった開発は
サトウキビなどの農業へ純度が高く良質な
硫黄が産業の第一歩

1892(明治25)年、農商務大臣によって硫黄鉱山試掘願いが許可され、本格的な硫黄採掘事業が硫黄島で始まった。硫黄島で採れる硫黄は、純度が高く、質が良いと高く評価され、本土の東京、大阪へと運ばれて販売された。この頃、硫黄はマッチ、染料、火薬、殺虫剤、製紙など、様々な加工製品に使われる貴重な資源であったため、火山島である硫黄島にふさわしい産業と考えられた。

人口の推移

年/内訳	硫黄島				北硫黄島			
	世帯	人口			世帯	人口		
		男	女	計		男	女	計
1895(明治28)	1	6	-	6	-	-	-	-
1900(明治33)	1	26	4	30	-	-	-	-
1905(明治38)	8	24	19	43	36	92	87	179
1910(明治43)	52	127	119	246	37	93	76	169
1915(大正4)	129	353	326	679	43	110	102	212
1920(大正9)	169	537	446	983	33	99	80	179
1925(大正14)	196	627	517	1,144	17	36	39	75
1930(昭和5)	-	548	480	1,028	-	69	55	124
1935(昭和10)	-	566	499	1,065	-	48	44	92
1940(昭和15)	184	563	488	1,051	21	53	50	103
1944(昭和19)	216	629	535	1,164	17	48	42	90

出典：「硫黄島関係既存資料等収集・整理調査報告書」(財)都市調査会 1982年

その後、入植以来、硫黄島の採掘権を持ち、開拓の指導的役割を担ってきた田中栄二郎は、採掘権を長谷部鉄之助に譲り、1903(明治36)年にはさらに久保田宗三郎が採掘権を受け継いだ。

しかしちょうどその頃、硫黄を採掘できる鉱区に限度があり、硫黄の採掘作業を一時停止しなければならない状況だったため、久保田宗三郎は原野の開墾に注目。積極的に他島からの移民誘致を進めるようになる。翌1904(明治37)年には東忠三郎も開墾事業に乗り出し、小笠原の父島・母島、八丈島などからの移民が増え ていった。



↑久保田宗三郎は1919(大正8)年、開拓と移民の誘致などの功績が認められて東京府から表彰されている(写真の右から2番目。1920(大正9)年、硫黄島にて撮影したもの)→千島が原のサトウキビ畑。もともとはタコの木の間が千島が原の広範囲にあったが、大正時代に開墾されてサトウキビ畑に。さらにのちにはデリス畑となった

サトウキビ栽培から
ココ、デリスなどの栽培へ

硫黄列島では開拓当初から硫黄採掘、漁業、そして野菜類の栽培が行われ、自給自足の生活が営まれていた。1907(明治40)年頃から一時的に綿花の栽培が主流となったが、1910年代にはサトウキビの栽培が盛んになる。1913(大正2)年には、拓殖会社の久保田拓殖合資会社が設立された。

これがその後、1920(大正9)年に買収されて硫黄島拓殖製糖会社となり、1936(昭和11)年に社名変更をして硫黄島産業株式会社となった。



One Point解説



物資の運搬は？

戦前、硫黄島と本土を結んでいたのは、2か月に一度の定期船だった。硫黄島からは採掘した硫黄、砂糖などを積み込み、定期船からは本土からの米や日用品、学用品、衣類などが届けられた。港がない硫黄島では、西海岸沖に錨を下ろした本船と島とを繋船で行き来し、荷物の積み下ろしはウインチを使って行われていた。

硫黄から砂糖、薬用植物へ。 主産業がめまぐるしく変化

火薬や化学製品などに 重宝された硫黄採掘

硫黄島の開拓初期と強制疎開直前の末期に、硫黄島での主産業のひとつであった硫黄採掘。軍需用の必要性が高まっていた昭和初期には、次のようなやり方で製品化されていた。

まず、摺鉢山の旧噴火口の周辺で硫黄華を採取し、山の斜面に設けた樋の上を滑り落とす。降りてきた硫黄華は元山の工場まで運ぶ。原鉱を蒸留釜に入れ、高温で煮詰める。蒸留してできた気体を凝集し、鋳型に入れて製品化された。

1902(明治35)年に硫黄採掘範囲が狭くなり、採掘を停止するが、1940(昭和15)年に採掘事業が再開された。



↑1935(昭和10)年1月のデリス畑
←硫黄華とは、硫黄の蒸気が急激に冷やされたときにできる黄色の粉末。硫黄島の硫黄華は純度が高く、良質とされていた

昭和初期に 砂糖の価格が下落

また、1910(明治43)年代から盛んになったサトウキビ栽培と製糖。1920(大正9)年前後まで、砂糖の価格は上昇傾向にあり、1920(大正9)年には硫黄島拓殖製糖株式会社が製糖に必要な圧搾機などを購入・改良し、さらなる事業拡大を試みたものの、昭和初期に入ると砂糖の国際価格が下落。

そのため、ほかの産業が求められるようになり、ココヤデリスの栽培が始まった。

ココ、デリス、 レモングラスの栽培

硫黄島でのココ栽培は1927(昭和2)年から始まり、翌年にはココ乾燥場が完成している。ココはココインの原料となる植物で、現在は多くの国で医療用を除く栽培が禁止されているが、当時の硫黄島では合法栽培。麻酔薬などの原料となるため、日本本土へ販売されていた。

また、デリスも乾燥させた根や葉が農業用殺虫剤の原料となる植物で、硫黄島では昭和初期から栽培が始まった。

ココとデリスに続いて、硫黄島で栽培が始まったのがレモングラス。これは主

にオイルに精製されて香料の原料にされた。1930(昭和5)年には元山の噴気孔付近にレモングラス精製のための工場建設が始まり、4年後にはレモングラスオイルの輸送のためにトラック3台が準備されるなど、順調に業績を伸ばした。

果物、サトウキビの 出荷も盛んだった

下の表「農作物作付面積」を見ると、父島・母島と硫黄島とでは、農作物の内容に違いがあることが見て取れる。硫黄島では果実が最も広く栽培されていて、甘蔗(サトウキビ)や薬用植物がほぼ同規模。

ただし、太平洋戦争の勃発を翌年に控えた1940(昭和15)年になると、小笠原の日本軍から指示があり、日本本土向けの蔬菜などの栽培を中止。軍が自給するための農作物(サツマイモ、カボチャ、漬物材料、生食菜類など)を栽培するようになった。



現在もレモングラスは硫黄が丘付近に自生。名前の通り、レモンのような香りが特徴。「枕の中に入れておくと、いい匂いがしてよく眠れた」と語る島民も ©Forest & Kim Starr

農作物作付面積 (1939(昭和14)年 東京都)

	父島	母島	硫黄島	合計	
				面積	価格(円)
甘蔗	2,020	8,190	10,050	20,260	11,532
果実	53,250	4,316	28,178	85,744	19,466
蔬菜	7,145	14,894	1,357	23,397	621,284
観葉	39	69	-	109	18,120
薬用	-	11,802	11,971	13,160	40,183

※単位はa(価格以外)。1a=100平方メートル
出典:『小笠原』59号 小笠原協会 2014年



1930(昭和5)に建設された硫黄島拓殖製糖株式会社事業部。このあと、製糖からレモングラスのオイル精製へと主軸を移していく



レモングラスオイルの工場。硫黄が原の噴火口から出る蒸気の熱を利用してレモングラスを蒸留し、精油を精製していた

One Point解説

小作人が多かった硫黄島

硫黄島の農業で特徴的な点は、小作人がほとんどだということ。小作料を支払って、地主から借りた田畑を耕作する小作の割合が、自分で土地を所有する自作、そして自作兼小作よりも高い。これは小規模自作農が多かった父島・母島などと大きく異なる。

また、小作人の過半数が拓殖会社の従業員との兼業であり、農業の合間に会社の工場労働(製糖、ココ製造、レモングラス精製など)、定期船への商品搬出入なども行っていた。

1939(昭和14)年時点の硫黄島における自作小作別農家戸数・人口

種別	専業				兼業			
	戸数	人口			戸数	人口		
		就業	従業者	計		就業	従業者	計
自作	2	25	12	37	-	-	-	-
自作兼小作	1	2	8	10	-	-	-	-
小作	22	50	135	185	61	158	218	376
計	25	77	155	232	61	158	218	376

出典:『硫黄島関係既存資料等収集・整理調査報告書』
財都市調査会 1982年

海に囲まれた硫黄島では 漁業も盛んになっていった

トビウオの干物や ムロ節を加工販売

農地開拓がひと段落した頃から、漁業に従事する人も増えてきた。漁は2艘式のカヌーを使って行われ、春にはトビウオ、夏から冬にはムロアジ、夏から秋にはマグロ、サワラが水揚げされた。このほか、硫黄島沿岸でとれるタイ類、サヨリ、ギスなども当初は各家庭で食べることを目的としていたが、自給の域を超えて島内外で販売するようになっていく。

当時は硫黄島島内で冷蔵保存・運搬ができなかったため、水揚げした魚は漁師やその家族が加工を施した。たとえばトビウオは干物に、ムロアジはムロ節に。またカツオ節やサメのヒレなどの加工も行っていた。

こうした加工品は、漁期に合わせて硫黄島の沖合に訪れる冷凍船が買い取っていったが、のちには仲買人が現われ、漁師は自家用以外の釣果すべてを引き渡すまでになった。また、硫黄島の西には市場が開かれ、カヌーから降ろしたものの、その時点でさばけなかった魚は、この市場で処理された。

もともとは自家用だった釣りが漁業に発展し、水産加工まで行ようになったが、漁業・水産加工業だけで生計を立てていた世帯は少なく、農業と漁業・水産加

工業の兼業が主流だった。強制疎開の前、1944(昭和19)年4月の時点で、漁業を主たる生計手段とする世帯は、硫黄島で7世帯44名、北硫黄島で8世帯48名という記録が残っている。



2か月に一度の定期船、芝園丸。
建造時はチーフ丸と呼ばれた



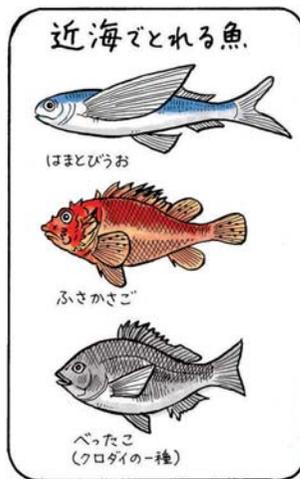
新造船の進水式の様子。西海岸に多くの島民が集まり、新しい船の誕生を祝った。船は硫黄島まで船大工を招いてつくらせたという



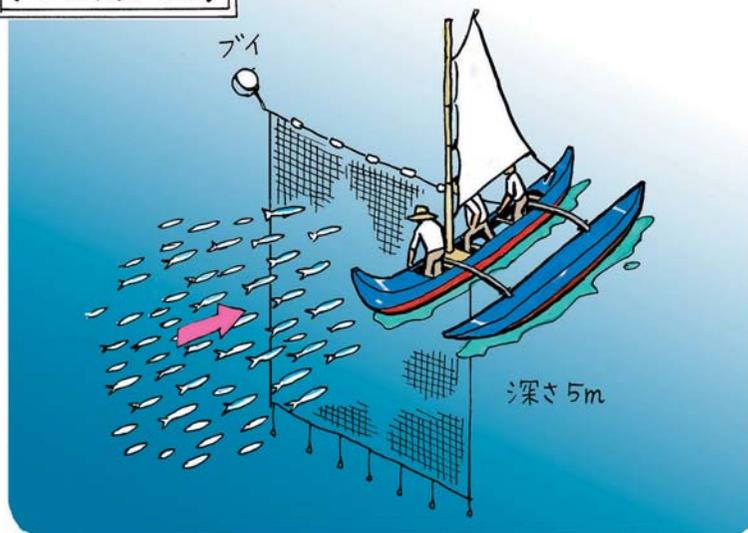
開いた魚を箱に並べ、天日干しにしているようす。奥に見えるのは、硫黄島で唯一の2階建てだったという家。硫黄島では平屋建てが当たり前だった

カヌーを使った漁

港がつけられなかった硫黄島では、西海岸と南海岸からカヌーを出して漁へ向かった。カヌーは2艘式になっていて、ウケと呼ばれる小さな艘に水揚げを入れ、帆を操って自在に進んだ。十数艘が風を受けて海面を走る姿は美しかった。



トビウオ漁のようす



島民の暮らし・風俗

無人島の開拓から始まり 強制疎開まで続いた島民の生活

硫黄島の生活は 水不足との戦い

硫黄島の暮らしで最も特徴的なのが、各家庭で貯水タンクを備えていたこと。硫黄島には谷川がなく、地下水も湧かないため、井戸を掘ることもできない。そこで生活に必要な水はすべて雨水で確保しなければならなかった。

日照りが続いた際には、複数あるタンクにも水がなくなってしまうため、硫黄島神社に集まって雨乞いを行ったり、待望の雨が降れば、仕事中だろうが授業中だろうが、島民総出でバケツやたらい、鍋など、ありったけの容器に雨水を受けとめたりと、水に関する苦労話は島民の間のことかかない。

工夫が凝らされた 硫黄島の住まい

開拓当初から大正初期の硫黄島では、千鳥が原などに群生していたタコの木タコノキの葉を使って屋根を葺いた小屋で暮らしていた。その後、屋根はシュロシュロの葉で葺き、

その上からコールタールを塗ったトタンをのせる民家が主流になっていったが、これは、より効率的に雨水を貯水タンクに集めるための工夫。

家の骨組みにはタマノの木を使い、床は板敷だった。硫黄島は温暖なため、畳を使う民家はほとんどなく、板敷の上にタコタコの木の葉で編んだゴザゴザ（はなゴザ）を敷いて暮らしていた。

煮炊きをする台所は母屋とは別棟になっていて、コック場と呼ばれ、ここで料理と食事をしていた。当時はガスも電気もないため、かまどや風呂は薪薪、タコタコの木の葉などを燃やして利用していた。灯りとしては、ランプを使う家庭がほとんどで、煤すすで汚れたランプを掃除するのも子供の仕事だったという。



開拓初期に硫黄島に建てられた屋敷。母屋のほかに独立したコック場、風呂場、離れなどがある



ほとんどの屋敷で植えられていたのがガジュマル。木陰に入ると涼しいため、こうして木の下にテーブルを出し、くつろぐこともあった

戦前の家のように

母屋とは別にあり、コック場と呼ばれた台所、雨水を溜めるタンクなど、硫黄島の家は特徴的だった。薪ではなく、地熱を利用して風呂を沸かしていた家もあった。



開拓後、移民が増え、部落が誕生 島民生活が充実していく

島の中心は 元山部落

開拓が進むにつれ、硫黄島内には古山部落、東部落、西部落、千鳥部落、南部落、玉名山部落、北部落、そして元山部落と、住民ごとに集まる部落が形成されていった。戦前の硫黄島に暮らす人たちにとって、生活の中心となっていたのが元山部落だ。元山部落は島の北東部の台地にあり、元山部落とその周辺部落に住民の大部分が住んでいた。学校、役場、医師、郵便局、駐在所、学用品販売店、旅館などが、元山部落に集中していた。

元山部落にあった4軒の商店のひとつ、



和名をキダチトウガラシ(木立唐辛子)といい、戦前から硫黄島に自生し、調味料として重宝されていた。硫黄島の島トウガラシは粒が小さく、強烈な辛さが特徴



タコの木。中央に房が集まるようになっているのが実で、戦前は中の種を取り除いたあとの実を豚にも食べさせていた。そのため、「硫黄島の豚はよく太り、味もいい」と漁船が買いにくることもあった



南国のフルーツとして知られるパパイヤも硫黄島ではよく実った。青から黄に色が変わったら熟したサイン。焼け野原になった戦後もいつのまにか復活して、硫黄島内に自生している

中島豆腐店は、1912(明治45・大正元)年から自家製の焼き豆腐、油揚げ、コンニャクの販売を開始。その後、この店で豆せんべい、塩せんべい、雑貨などの販売も始まった。ほかにも、日本本土から運ばれる米や醤油、塩、白砂糖、味噌、ビール、酒類、サイダー、菓子なども販売されていた。

こうした商店で硫黄島内にはない物品を購入でき、また、店頭にはない場合も、注文をしておけば次の船便で本土から届けられたほか、漁師と物々交換もできたため、戦争によって配給制度が始まるまでは、硫黄島では日本本土にいるのと変わらない生活を送っていた。

豊かだった 島での食べ物事情

入植して間もないころから大正時代に硫黄島で主食として食べられていたのは、サツマイモ(甘藷)。サツマイモは硫黄島の火山灰土壌でも育ちやすく、昭和に入ってから大麦や内地から運ばれる米が食べられるようになってからも、島民たちによく食されていた。

ほかに硫黄島らしい食べ物として、タコの実が挙げられる。根がまるでタコの足のようなことから名前が付いたタコの木から採れる実で、黄色く熟れた房を割り、中に入っている種を食べる。脂肪

が多いタコの実は、味噌と合わせて鉄火味噌にしておけば保存食になり、おにぎりに塗って食べたという。

マンゴー、アナナ(別名・釈迦頭)、オレンジ、天津水蜜桃、桃、パパイヤ、レモン、パイナップル、スイカ、カキなど、豊富なフルーツも硫黄島ではよく実り、島民が収穫して食した。

家畜としては、豚、鶏が一般的で、牧場ではなく、各家庭で飼育していた。なかにはアヒル、七面鳥、ヤギを飼っていた家庭や、荷物運搬などの労役をさせるための牛を飼育している家庭もあった。

もちろん、島の周囲を囲む海の恵みも食料となった。タイ類、マグロ、トビウオなどのほか、硫黄島ではウミガメも貴重なタンパク源として、煮物などに料理されて食べられていた。

また、冷蔵庫がないため、魚や肉は塩漬けにして保存するのが一般的。醤油は島内でつくれなかったが、味噌については大豆を本土から取り寄せて、自家製味噌をつくる家庭もあった。

ne Point解説



宴に喜ばれた島寿司

お祝いの席や客をもてなす宴会などで食べられたのが島寿司だ。一般的な寿司との違いは、ネタを醤油で漬け込むこと。ワサビではなく、練りがらしを使う点も硫黄島の島寿司の特徴で、酢の代わりに島レモンを搾って作ることもあった。

島寿司の中でも、サワラの握り寿司は、醤油に漬け込んだサワラの身がベッコウのような色に見えるため、ベッコウ寿司とも呼ばれた。

また、宴会のために鶏や豚をつぶすこともあり、食べきれない時には近隣住民で分け合うのが当たり前だった。



家のそばにバナナを植えている家庭も多かった。島バナナとも呼ばれる小ぶりな実だが、よく熟して黄色になると甘い。島民の定番おやつ

TIPS:01 硫黄島の花・植物

ほかに硫黄島で見られた草花には、以下のようなものがある。

●野生タバコ

戦前、島民が自分たちで喫煙するために栽培していた。今は島内のあちこちに自生している。

●リュウゼツラン

戦前に持ち込まれた単子葉植物。鋭いトゲのある鋸葉が特徴。高い花茎を伸ばして、黄緑色の花を咲かせる。

●ヤシ

開拓当初、ミクロネシアから持ち込まれた。

●月下美人

1年に一度、夏の満月の夜に花を咲かせるサボテン科の植物。花は純白で、硫黄島では毎年咲いていた

●ブーゲンビリア

戦前、島内へ持ち込まれた。小さな花を一齐に咲かせる小高木で、花には様々な色がある。

●ポトス

観葉植物としても知られる蔓性の着生植物。硫黄島ではギンネム、ガジュマルなどに絡みついて育っている。

●モンパノキ

潮害や塩害に強く、海岸の砂礫地や砂浜に自生。小さな釣鐘型の花が密集して咲く。

硫黄島での「冠婚葬祭」。 その背景と状況を読む

ご馳走を並べ 島を挙げて祝った結婚

このページでは、島民の暮らしを冠婚葬祭というキーワードで紹介しよう。

まずは婚。結婚について。硫黄島での結婚は、当時の日本本土と同様に見合いによるケースが多く、仲人が間に立って両者を取り持つのが当たり前だった。

また、もともと小笠原の父島・母島、八丈島からの入植者が多いこともあり、お互いに縁者、知り合いだというケースも多かった。

顔の広い家では、全島民をあげての披露宴となり、島寿司に使う米が一俵(400合=60kg)、マグロやサワラが1~2本、醬

油は一斗樽(=18ℓ)という豪快な宴もあった。

また、こうした宴会の席では、豚や鶏を絞めてふるまうこともあり、豪勢な肉料理を分け合って楽しんだ。招待客のほか、野次馬として訪れる人も多く、あまりに豪勢な宴になるため、結婚披露宴だというのに費用の工面が気になって、ハラハラする新郎もいたという。

浄土宗による仏式の葬儀 西部落で盆の弔いも

次に葬祭について。硫黄島には格式のある僧侶がいなかったため、経本を持った人が経文を唱え、通夜と葬式を執り

One Point解説

戦前の「軍属」とは

戦前・戦中期、旧日本陸海軍で勤務していた軍人以外の者の総称。戦うことが仕事である軍人とは別に、軍事上に必要な様々な仕事を行うための人員。行政事務を行う文官と文官待遇者のほか、雇員(技工士、調理士、裁縫士、医務助手など)、傭人(操船手、軍用郵便手、裁縫手、割烹手、理髪手、洗濯手など)がある。

行っていた。これは浄土宗の仏式に従ったもの(のちに日蓮宗式も加わる)。

忌明、供養の際には多くの主婦たちによって大数珠、念仏が唱えられた。葬式では先ガネという先達者が鐘を鳴らし、棺や参列者がそれに続いた。棺には三角の頭巾、杖、草履、三途の川を渡るための六文銭のほか、思い出の品物を収め、白装束ではなく本人が最も好んだ服を逆さにしてかけた。

定住者が入植した初期は土葬が多かったが、やがて火葬に代わり、翌日に近親者が壺つぼや甕かめをもってお骨を拾いに行くようになった。

お盆には必ず墓参り そのあとは盆踊りへ

お盆にあたる7月7日は毎年、島民たちが西部落へ出かけ、墓地の草刈り、掃除を行い、13・15日には香を焚き、盆提灯ともしを灯して、弔いをしたという。

島民のほとんどが先祖・縁者の墓参り

を行い、灯したローソクの火が消えると、島民は連れだって元山へ向かい、盆踊りをするのが習わしだった。

なお、1990(平成2)年、西部落に硫黄島旧島民平和祈念墓地公園が設けられたのも、もともと西部落に島民たちの墓地があったためである(ただし、戦争中に米軍から受けた爆撃などで地形などの変化があったため、正確に同じ場所であるという確証はない)。

冠婚葬祭の「冠」。 区切りは15歳

そして冠。古くは15歳の元服に由来し、冠を頂く(社会的な役職や参政権を得る=大人として認められる)の意味を持つ冠だが、硫黄島での「15歳」もまた大きなターニングポイントになった。

戦前に関しては、そのまま硫黄島島内で進学・就業するものもあったが、経済的に余裕があり、また高度な教育を受けさせたい家庭では、日本本土の高等学校などへと子供だけを進学させることもあった。

また、戦時中に15歳が大きな意味を持ったのは、軍属に関しての判断である。1944(昭和19)年の6~7月、旧島民が強制疎開を余儀なくされた際、15歳以下は軍属としての徴用を免除されたためである。

15歳であれば、のちに戦地となる硫黄島から疎開。16歳であれば、軍属として硫黄島に残り、激しい戦火にさらされることになる。硫黄島島民にとっての「冠」は、生死をかけた分岐点だった。



↑硫黄島旧島民平和祈念墓地公園内。中央に旧島民先祖供養塔、左に硫黄島旧島民戦没者名の刻まれた碑、硫黄島開拓の碑が建っている

←硫黄島旧島民平和祈念墓地公園から西の海岸線を望む。戦前はこの西海岸の沖に定期船がやってきて、物資を運んだ

島民の 声

を聞く
Voice 1

1930年生まれ

山下賢二さんの証言



山下賢二さん／硫黄島生まれで南部落出身。半農半漁を営む父、澄作と母、千代の二男として生まれる。15歳で強制疎開になり、栃木県へ。全国硫黄島島民の会の前会長。

明治37年に祖父が入植。 硫黄島生活が始まる

「陸軍の兵士が入ってくるまでは、南の楽園だったんです、硫黄島はね」。

山下賢二さんはそう言って目を細める。硫黄島は小さく、摺鉢山のほか、高い山はない。「だから、海風が吹けば島を通り抜けていく。暑い島だったけど、木陰に入れ

ば案外涼しかったですよ」。

山下さんの祖父は明治時代に硫黄島の開拓に入り、「開拓した土地は自分のものになる」と言われて、盛んに開拓を行った。山下さんの少年時代には家族は主に漁業を本業とし、ムロアジ、トビウオ、マグロ、サワラ、サヨリ、ギス、鯛類などがたくさん獲れたという。「硫黄島には電気がないから、保存のために加工するわけです」。ムロ節やトビウオの干物など、水産物加工が忙しい時期には、小学生の山下さんも家業を手伝い、「学校に行ってる時間がないこともありましたよ」。トビウオの干物をつくる時期には、スコールが降ると学校を抜け出して家に帰ったという。干物にするため、さばいたトビウオを三和土に並べ、天日に干してから学校へ登校するのだが、これが雨に濡れてしまえばダメになってしまう。「この時ばかりは、先生も分かってるから怒らなかったね」。

漁業、水産加工、 農業も盛んだった

荒天のため、海で漁ができない時には畑仕事。漁業が本業といっても、山下さんの家には7,000坪ものココヤシ畑があった。「ココヤシの手伝いは3年生くらいからやっていました」と振り返る山下さん。ココヤシを刈り取って袋詰めにし、運搬できるように畑から道路まで運び出す。硫黄島で栽培されていたココヤシは麻酔薬の原料として、内地の製薬会社に向けて搬出されていた。「特に昭和16(1941)年に大東亜戦争が始まったころから、ココヤシの栽培が増えたと

思いますね」。

ココヤシ以外の農作物も豊富だった。「大正時代から多かったのがサトウキビ、バナナ、カボチャ、パイナップル。島ではパイナップルじゃなくて“タイナップル”って呼んでいましたね。パパイヤは“パパヤ”と呼んでいました」。

ほかに香水などの原料となるレモングラス、スイカにマンゴー、農薬の原料になるデリス、ベチバー(イネ科の多年草)なども、積極的に栽培された。

「硫黄島ではたいがい肥料は必要ないんです。開拓が始まった頃から海鳥が多くてね。海鳥のフンで土地が肥えていたんですよ」と山下さん。アホウドリ、カツオドリ、コチョウウなどが硫黄島には多く生息していた。メジロも多く、「ひょいっと手で捕まえられるくらいでしたよ」。さらに、浜千鳥がたくさんいるので、「真っ暗な夜でも、こっちに浜がある、と方向が分かったくらい」だったという。

次第に変わる生活。 そして強制疎開へ

そんな生活に徐々に変化が訪れる。1933(昭和8)年、千島が原に海軍が飛行場を仮設。その後も飛行場の拡大と増設を進めていく。

「日本軍としては、南方へ行く時の補給・給油の基地として、硫黄島はちょうどいい場所だったんでしょうね」。

それまで主食は内地から買う米と麦で、都会と変わらない生活を送っていたが、定期輸送船が途絶える可能性があるた

め、米は備蓄し、「サツマイモを積極的につくるように」と言われたという。山下さんの自宅には陸軍部隊が本部として駐屯することになり、1944(昭和19)年6月15日に硫黄島初の空襲。翌16日も空襲があり、24日には3回目の空襲が行われた。この時は空襲のあとに艦砲射撃もあり、人的被害はなかったものの、「自宅の太い梁が数本、えぐれてしまった」という。

それから間もなく、3回に分けて硫黄島島民の強制疎開が行われた。硫黄島からは小さなカツオ船に乗り、デッキでシートを被ってじっと息をひそめた。父島からは利根川丸という輸送船に乗り換え、魚雷に襲われながらも辛うじて横浜にたどり着いた。そして親戚を頼って栃木へ縁故疎開。そこで終戦の日を迎えることになる。

「あの頃とは景色が違う」と言いながらも、戦後、何度も墓参事業で硫黄島へ足を運ぶ。硫黄島こそ、山下さんの故郷だから。



2015(平成27)年の墓参事業の際、おがさわら丸の船内で小笠原の中学生に硫黄島について様々な話をする山下さん

生徒12名の寺子屋授業から 子供たちへの教育が始まった



1936(昭和11)年3月、尋常科卒業記念



1936(昭和11)年、小学校の入学式



1937(昭和12)年、小学校入学記念

始まりは私塾。 掘立小屋での授業

硫黄島に初期の開拓者が入った1904(明治37)年。この時の開拓者の一人が東京府から開墾の認可を得て、母島から入植した東忠三郎だ。

東忠三郎は教育に関心が高く、1906(明治39)年3月に西部落にある自宅を仮の校舎として、私塾を開いた。この私塾のために、東は藤井亨を父島から招き、子供たちへの授業をさせていた。生徒数男女12名。これが硫黄島の学校の起源だ。

島民一同との協議の結果、同じく1906(明治39)年の9月には、西海岸近くに仮校舎を建設。西校舎と呼ぶようになる。この西校舎はヤシ科の高木、ビロウの葉で屋根を葺き、東・西・南の三方もビロウの葉で囲った掘立小屋。内部の柱や梁は太い丸太を頑丈に組み合わせ、床はただの砂地。その砂の上に木製の長机、イスを置いて、教室としていた。

こうした校舎の建築、教員の俸給^{ほうきゅう}など、かかる経費はすべて東忠三郎が私費を投じていた。

認可学校となり 元山に新校舎を開設

その後、1913(大正2)年3月に東京府知事宛てに公立小学校設置の申請を出し、4月に認可されて東京府小笠原島大正尋常小学校として創立される。

翌年には西海岸にあった西校舎から、

島の中心部である元山に校舎を移転。敷地面積500坪、新築された校舎は75坪という立派なものだった。さらに翌年には、大正尋常小学校の卒業生が農業を学ぶため、大正実業補習学校を併設。1918(大正7)年には高等小学校が設置されて、45坪の校舎が新築された。

こうして着実に硫黄島の教育環境は整っていき、1925(大正14)年の児童数は246名に達したという。硫黄島は内地から約1,250kmも離れた島であったが、教育環境は当時としてははるかに整っていた。

One Point解説



児童数の変化

私塾として始まった硫黄島の学校。スタート時は12名の児童数だったが、1925(大正14)年には246名まで増える。開拓から約20年でこれだけの教育環境が整ったのは、東忠三郎はもちろん、学校教育を支えた島民たちの教育に対する意識を高さの現われだろう。

1925(大正14)年児童数246名内訳

学年	尋常科 総計212		
	男	女	合計
1年	26	18	44
2年	19	17	36
3年	22	17	39
4年	18	20	38
5年	14	12	26
6年	16	13	29
学年	高等科 総計34		
	男	女	合計
高1	8	14	22
高2	8	4	12

出典：「硫黄島同窓会会報 3号：硫黄島——村は消えた、戦前の歴史をたどる」中村栄寿 硫黄島戦前史刊行会 1983年

学校は「教育の場」から「児童を鍛錬する場」へ

青年学校が誕生。戦争の影が近づく

こうして大正尋常小学校、大正実業補習学校、大正高等小学校と、学校がつくられていった硫黄島。1926(大正15・昭和元)年に青年訓練所ができると、大正農業補習学校(前身は大正実業補習学校)と対象年齢層が一部重なり、二重学籍になる生徒が出ることなどから、2つを統合して青年学校が創立された。

1935(昭和10)年に発足したこの青年学校には、普通科、本科、研究科・専門科が置かれ、職実務教育とともに軍事教練も行われた。翌年には学校の敷地内に家庭科実習室を兼ねて、青年学校兵器倉庫が建設され、学校教育の現場にも戦争の影が近づいてくる。

どんなことを学んでいた？

戦前の授業内容

戦前の学校と現在の学校では、授業内容が異なる。明治14年小学校教則綱領によると、授業日数は最少限32週、授業時間は1日原則5時間以下と定められていて、科目は以下の通りだった。

● 授業科目

初等科(小学校1~3年)

修身、読書、修辭、唱歌、体操

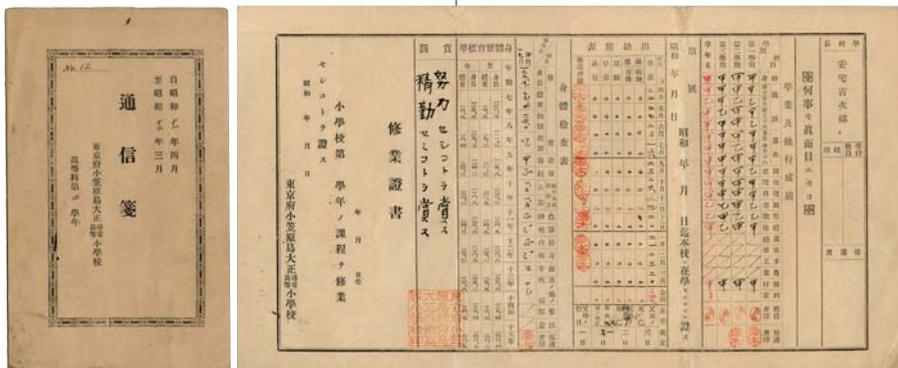
中等科(小学校4~6年)

上記の初等科の内容に加え、地理、歴史、図画、博物、物理、(女子のみ裁縫)

高等科(高等2年)

上記の中等科の内容に加え、化学、生理、幾何、経済、(女子のみ家事経済)

昭和10年代の高等科通信簿。成績は甲乙丙で評価されている



国民学校令発布により軍国教育が始まる

1941(昭和16)年、国民学校令が発布され、学校制度が改革された。尋常小学校は国民学校初等科へ、尋常高等小学校は国民学校高等科へと変わった。義務教育は6年から8年に延長となり、教育勅語にも続く、国のために奉仕をする「少国民」教育が始まる。

その一例が以下、教育信条の変更だ。「一、私達は天皇陛下の御民です。

君に忠に 親に孝に

誠の日本臣民になります。

一、私達は大正国民学校の児童です。

教えに尊び 業を励み

高く学校の名を輝かします。

一、私達は大東亜を興す国民です。

心を練り 体を鍛え

強く皇国の力となります」

教育簿に明記されたこの信条は、折にふれて生徒たちに唱和され、教育の場にも軍事色が浸透していった。

教育勅語とは

正式には「教育ニ関スル勅語」といい、明治天皇が山縣有朋内閣総理大臣と芳川顕正文部大臣に対して、教育に関して与えた勅語。1890(明治23)年に発表されて以後、軍国化に進む大日本帝国において、政府の教育方針を示し、日本の教育の根幹とされた。

ne Point解説 国民学校令とは

それまでの小学校令を全面改正し、初等教育・前期中等教育を行う国民学校について定めた勅令。1941(昭和16)年3月1日に公布、同年4月1日に施行された。国民学校とは皇国民錬成のための学校とされ、子供は国・天皇のために奉仕する「少国民」であるべきとされた。

硫黄島の教育制度の変遷

1913 大正2				
1914 大正3				
1915 大正4				
1916 大正5				
1917 大正6				
1918 大正7				
1919 大正8				
1920 大正9				
1921 大正10				
1922 大正11				
1923 大正12				
1924 大正13				
1925 大正14				
1926 大正15 昭和元	大正尋常小学校(6年)		大正実業補習学校(4年)	
1927 昭和2				
1928 昭和3				
1929 昭和4	大正尋常高等小学校(2年)		大正農業補習学校(4年)	青年訓練所(4年)
1930 昭和5				
1931 昭和6				
1932 昭和7				
1933 昭和8				
1934 昭和9				
1935 昭和10				
1936 昭和11				
1937 昭和12				
1938 昭和13				
1939 昭和14				
1940 昭和15				青年学校(4年)
1941 昭和16				
1942 昭和17	大正国民学校初等科(6年)	大正国民学校高等科(2年)		
1943 昭和18				
1944 昭和19				

思い出に残る学校行事① 調味料持参で行く「遠足」

サトウキビが水筒がわり 高等科は釜岩までの遠泳

学校行事で子供たちが楽しみにしていたのが、春に行われていた遠足だ。1930(昭和5)年に行き先として候補に挙がったのは海岸遊び、製塩場見学、サトウキビしぼり、玉名山見学、ココヤシ見学、摺鉢山、サトウキビ畑、金明水と銀明水、鉈岩、千鳥が原。こうした行き先まではひたすら歩く、文字通りの遠足で、さらに、高等科では浜から釜岩まで1kmの遠泳が行われた(その後、硫黄島が隆起し続けているため、現在では釜岩と硫黄島は地続きになっている)。

そして硫黄島の遠足で特徴的なのが、児童・生徒が一人一人、サトウキビを1本、かついで参加するという点。このサトウキビは水筒がわりで、のどが渇いたらサトウキビの硬い皮を歯でかじりとり、なかの汁を飲むのだ。

弁当はなく、現地で料理 摺鉢山の卒業記念遠足

遠足の行き先はその時々で変わったが、卒業記念として行く摺鉢山の遠足は、子供たちが最も楽しみにしていたもの。牛に引かせた荷車に鍋、釜、米、味噌などを

積んで、元山部落の学校から約4kmの摺鉢山ふもとの海岸へ。海辺で火をおこし、男子は魚を釣り、女子は米を炊くなどの役目を果たし、各自が分担して持ち寄った調味料などでその場で料理をする。そうやって生徒たちの手でつくられた料理は、まず先生たちに供され、その後、子供たちもまじえて味わうのが習わしだった。



硫黄島では、サトウキビが水筒がわりにされた。皮を歯ではがして何度も噛んでいると、じんわりと甘い水分が口のなかに広がる

One Point解説

摺鉢山の別名はパイプ山

硫黄島島民は摺鉢山のことを「パイプ山」と呼ぶ。これは摺鉢山の山頂付近から火山活動による蒸気が上がって、海の上から真横に眺めると、パイプでタバコをくゆらせているように見えることから。



昼食はみんなで作る

「あなたは米」「あなたは味噌」と前もって先生から指示が出され、遠足当日は調味料などを持参。現地で調達した魚や貝などをみんなで調理して青空の下で食べるのが、遠足最大の楽しみだった。



思い出に残る学校行事② 島民総出で盛り上がった運動会

子供も大人も夢中に。 体力自慢の島民が勝負

学校行事のひとつ、運動会。学校の行事ではありながら、娯楽の少なかった戦前の硫黄島では、運動会は全島民を上げての一大イベントだった。

徒競走、騎馬戦、玉入れ、綱引き、棒たおし、全生徒による体操などの定番種目のほか、逆立ち100m競争といったさまざまに趣向を凝らした競技や演技が行われた。そんななか、最も盛り上がったのが男子の部落対抗リレー。青年会のブラスバンドの活躍をさらに盛り上げた。そして勝った部落では豚をつぶして、盛大な祝宴を開いた。

硫黄島にも戦争が近づいていた1942（昭和17）、1943（昭和18）年頃の運動会では、航空隊・海軍の兵士、飛行場を建設していた作業員なども参加して、大人のリレーが行われたという。

また、硫黄島の学校には校歌がなかったため、開会式には全員で「運動会の歌」を歌うのが恒例だった。

One Point解説

硫黄島のブラスバンド

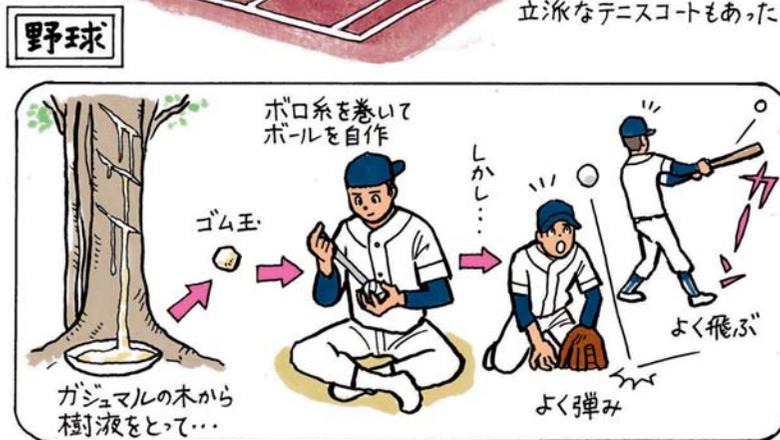
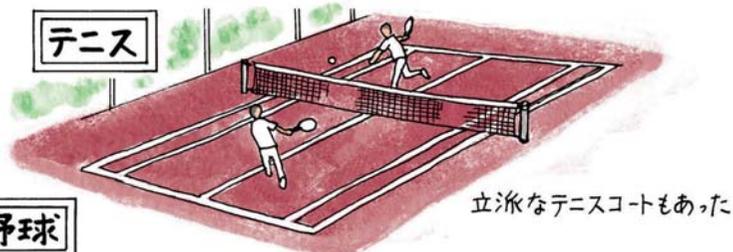
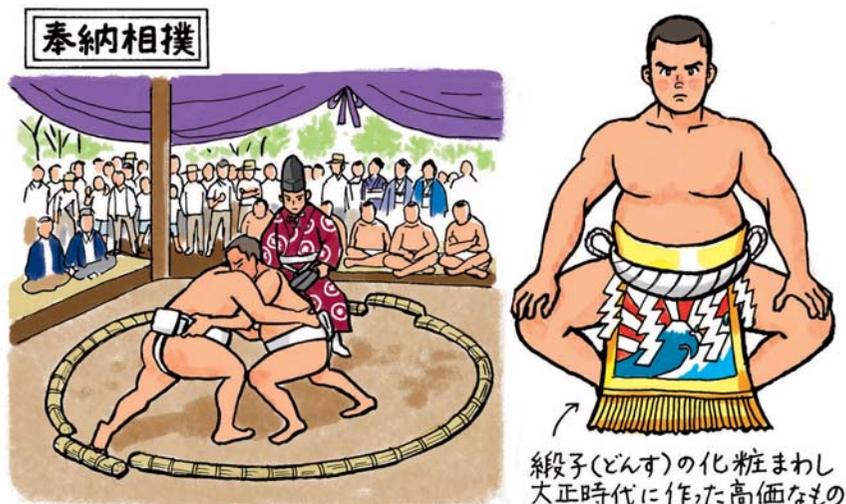
青年会にはブラスバンドが編成されており、大太鼓、小太鼓、コルネット、バリトンサクソ、アルトサクソ、クラリネットなどの楽器がそろっていた。楽団員はそれぞれの仕事のあとに集まって練習をし、学校の運動会のほか、子供のリズム遊戯の伴奏としても活躍した。

運動会の歌

- 一、
日頃鍛えに 鍛えたから
見せるは此の時 いざ腕だめし
走りくらなら アラビヤ馬よ
高跳び巾跳び カンガルなんの
- 二、
足は金鉄 磨きをかけて
フットボールは 天へも届け
腕は筋金 よりをばこめて
綱もちぎれよ 引くたびたびに
- 三、
勝つも負けるも 勝負はならい
自分が全力 尽くした上で
勝てば喝采 負けても拍手
つゆも卑劣な ふるまいするな

盛んだったスポーツ

スポーツも盛んだった硫黄島。特に秋に毎年行われた硫黄島神社での奉納相撲、青年学校や青年会でチームがいくつもあった野球は大人気だった。多くの島民は体格がよく俊足で、学校の運動会には大人も参加していた。



島民の 声

を聞く
Voice 2

1929年生まれ

渡部敦子さんの証言

祖父が明治37年に入植。 硫黄島生活が始まる

のちに硫黄島に学校を開設する東忠三郎が硫黄島に入植した1904(明治37)年、東忠三郎と一緒に母島から手漕ぎ船で硫黄島へ渡ったのが、渡部敦子さんの祖父。祖父たち兄弟数人はまず、釜岩をあがったところ、東山を開拓。西海岸に掘って建て小屋を建て、漂流木でカツオドリの胸毛を採る仕事から始めた。

「当時、漂流木には誰も入っておらず、そのうち無岩に行き、開墾を始めたそうです。当時は開墾すればその土地は自分のものになったそうで、親戚が入った場所は断崖の地で海にも行けない場所。元山や千鳥のほうはいろんな人が入ってきましたが、そこは誰も入ってこないところだったので、結果的にはよかったと思います」。

祖父たち兄弟は西部に立派な家を2軒並べて建て、それから親兄弟、親戚を呼び寄せて開墾を広げていった。「無岩に土地を持っていたのは、当時は(祖父たち)菊池の兄弟、親戚だけだったようです」。

羽毛採取から始まった仕事は、次第に半農半漁へと規模を広げていく。

「菊池家の人たちはゴマ、サトウキビ、ス



渡部敦子さん／旧姓菊池。硫黄島生まれで北部落出身。強制疎開時は15歳。戦後は福島、父島、青ヶ島で暮らし、東京へ。現在は、栃木的那須でのんびりと暮らす。

イカ、カボチャなど。キュウリは苦くなってしまってダメでしたが、ほかに青ウリ、白ウリなど」を栽培。カボチャは白い紙に包んで東京へ出荷。パイナップルも業者が買い付けにきていた。「本家のおじいさんは漁師もやっていた、毎日仲買が買いにきていたため、毎日収入がありました」と渡部さんは語る。

果物に羽毛布団。 豊かだった生活

祖父たち兄弟に続いて、渡部さんの両親もそれぞれ青ヶ島、母島から硫黄島に移住。渡部さんの父は硫黄島でただ一人の木挽きとして、タマナの木で板材をつくり、毎日硫黄島産業に卸していた。

「当時の船は木造船ですから、一度酔に使うと本船にぶつかったりして、いたるところに隙間ができます。父は会社から樹皮を預かっており、それを縄状にし、隙間に

詰める作業を毎日小屋でやっていました」。

各家庭で豚、鶏、牛などの家畜を飼っていて、牛は乳を採るよりも牛車としてサトウキビ、魚などの運搬に使った。「自動車は軍隊が入ってきてからは飛行場にありましたが、当初はどこにもありませんでした」。

また、湿度の高い硫黄島ではカビが生えやすい畳よりも板の間のほうが合理的。そのため、ほとんどの家庭は板の間生活だったが、「私は羽毛布団で寝ましたよ」と渡部さんは言う。海鳥が豊富な硫黄島で、初期の開拓者が羽毛採取をしたように、渡部さんが硫黄島で暮らした昭和初期にも、羽毛は硫黄島でよく使われていた。「寝る前には片寄ってしまった中の羽毛を直すのが習慣になっていました」。

菊池家があった無岩には1本だけ岩が立っていて、その下に3段の畑がつくられていた。「畑では篠竹を栽培して、御幣をつくったりもしていました。御幣というのは、神様に捧げるものですね」と渡部さん。硫黄島には大神宮様と呼ばれ、島民から愛された神社があり、秋の例大祭は島をあげてのお祭りになった。



↑ウミガメをやわらかく煮てある。「コラーゲンがたっぷりです」
←中央にあるのがべっこう寿司とも呼ばれる、サワラの島寿司。

硫黄島ではきちんと小学校にも通い、文化・教育は都会並みだったと振り返る。「疎開先では地元の子供たちがみずばらしい着物を着て、みんな漬を垂らしている場所もあり、島の生活との違いに非常に驚きました」。

勤労奉仕から疎開へ 自宅は吹き飛ばされた

しかし、戦争がそんな豊かな生活を奪っていく。6年生になると勤労奉仕として、学校ではなく千鳥の飛行場づくりへ行く毎日に。

「内地から飛行機が飛んでくると、翌日にはサイパンに飛び立つので、慰問袋にバナナなどを入れて、絹のマフラーをした十代後半と思える少年飛行兵に渡したりしました」。

硫黄島上空で繰り広げられた空襲では、日本軍1機に対して米軍は10機以上が襲い掛かり、「ほとんどは十分に飛び上がる前に、次から次と日本の飛行機は落とされていきました」と渡部さん。

自宅は一部が軍の宿舎がわりに接収され、軍の無線機が据えられていたためか、艦砲射撃によって狙われた。「終わって家に帰ったら、跡形もなく吹き飛ばされていました」。そして軍からの命令により、内地へ疎開。第2便で軍艦に乗ったためか、父島で水を補給するとすぐに内地へ。荷物は3個まで持ち込めたという。

「砂糖の壺を持っていったので、疎開先でずいぶん助かりました」と語る渡部さん。「戦争がなければ、硫黄島は楽園でした」。

農作業にタピオカづくり、加工品販売もした学校農場

高等科の学校農場で野菜をつくって販売

硫黄島の高等科、大正農業補習学校には、立派な学校農場があった。これは生徒たちが農業の授業で実習の場としていた農場で、カブ、京菜、スイカ、トマト、玉ねぎ、バナナなどが実った。

また、学校農場では綿花も栽培していて、綿を摘み取り、日干しをし、さらに綿切り機械を使って、綿に仕上げるところまで、女子生徒たちが担当していた。

タピオカづくりも女子生徒の仕事。掘ったイモの皮をむいて、すりおろす。使うのはクギで穴を開けたブリキやトタン板だ。すりおろしたイモはサラシの袋で濾し、紙を敷いた簾すだれにのせて数日間、天日干しをする。

こうした野菜などは、放課後に生徒たちが近くの家々を売り歩いたり、入港中の船の乗組員に土産として買ってもらうたりした。なかでも綿は予約が出るほどの人気だったという。

売上金は苗木や農薬などの支払い分を除いて、全額が学年末に行われる卒業記念謝恩会の費用として使われた。売り上げがいいため、かなり盛大なパーティを開くことができたという。

タマナの木、梅檀の花で緑取られた美しい学校

1914(大正3)年に建てられた大正小学校の校舎。その後、1921(大正10)年に西側に新校舎が加わった。どちらも1階建ての平屋で、1つの教室を2つの学年で使用。職員室、宿直室もあった。敷地内には校長の住居、教員住宅もあり、大きな貯水タンクが地下に備わっていた。1930(昭和5)年には2つの教室を備える分教室も近くに設置された。

校舎の東にチギの木、西側には小高い丘があり、タコの木などの木々で囲まれていた。校舎の南側には十数本の梅檀の木が校舎に沿って並んでいて、3月になると淡い紫色の小さな花を咲かせた。創設当初は裏庭にタマナの大樹が1本あっただけだが、職員たちの努力によって、美しい木々、花に囲まれた学校へと変わっていったのだ。

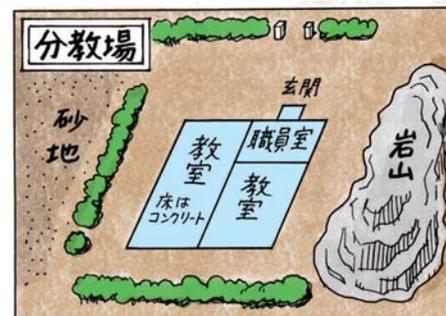
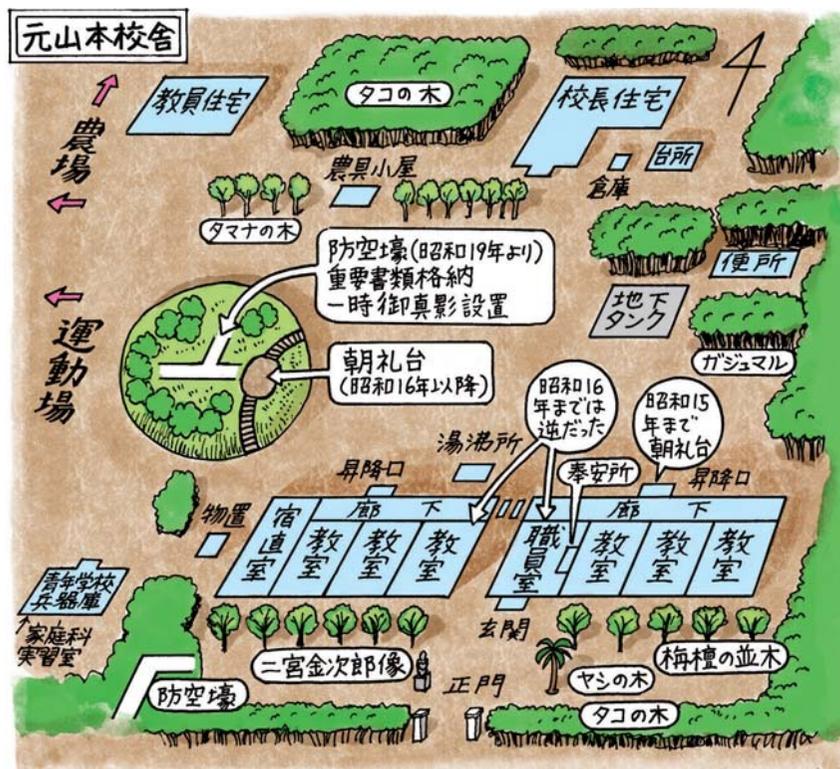
Point解説

奉安所って何？

戦前の学校に必ず設置されていた施設で、天皇后の写真(御眞影、御影ともいう)および教育勅語を安置していた場所。奉安所の前を通るときは最敬礼をすることになっており、学校長の最重要職務として御眞影の取り扱いには最大の敬意と細心の注意が払われた。硫黄島の学校では職員室内に設けられていたが、米軍の攻撃が始まると一時的に防空壕内に避難させられた。

1944(昭和19)年頃の学校

砂地に机を置いた掘立小屋だったため、スナッパ(砂場)学校と呼ばれた学校が、移転、新設、分教室の増設によって、やがて立派な学校に。ガジュマル、タコの木、梅檀に囲まれた美しい学校だった。



家のそばで飼われていた 牛・豚・鶏

牛は荷役用。豚は特別な 日のご馳走だった

1920(大正9)年～1923(大正12)年の3年間平均の飼育数は牛142頭、豚403頭。1920(大正9)年の世帯数が173世帯(人口983名)であることを考えると、ほぼ半数以上の家庭で牛を飼育していたと推察できる。比較的育てやすいホルスタイン種などが多かったが、乳牛としてよりも、農作物や魚の水揚げを運搬するために重宝されていた。

豚も農家を中心に各家庭で飼育されていた。大正初期には硫黄島の豚は内地に出荷され好評だったが、取引価格が予想より下回るようになり、1923(大正12)年頃には1頭20円にしかならなかったため、ほとんどの豚が島内消費された。ただし、自分たちで食べるのは結婚式や祝い、誰かのもてなしなどの限られた機会、日常的に食べるものではなかった。

1921(大正10)年に農会でアメリカ産の赤豚3頭を輸入して増殖させると、数年で70頭に増え、そのうちの1頭は1年で



バナナを棒にぶら下げて運び子供たち

110～150kgに、3年で340kgにも肥えたという。このようによく育つ上、味もいと評判が高く、南方へ向かう輸送船がわざわざ硫黄島へ寄港して、硫黄島の豚を買い求めたという。

これは、脂分の多いタコの実やサトウキビを煮詰める時に出る甘いアク、サツマイモやカボチャなど、栄養価の高いエサを食べさせていたからだといわれている。

鶏は放し飼い 卵は貴重なタンパク源

鶏小屋はなく、家の近くに放し飼いをしていた。自由に動きまわり、決まった場所で卵を産まないの、子供たちが目星をつけて草むらなどを探して回収したという。鶏卵は島民にとって貴重な動物性のタンパク質であり、また、時には鶏をさばいて肉を食べることもあった。



子供たちが牛や豚、鶏の世話をした。学校に通いながら、また弟妹の世話をしながら家事手伝いをするので、子供たちは「忙しい生活だった」という

働き者の子供たち

ランプの煤を掃除したり、卵を集めたりといった家事はもちろん、弟妹の世話は当たり前のように年長の子供の仕事とされていた。さらに家畜の世話、農作物や魚、加工食品の運搬にと子供たちは忙しかった。



島民の 声

を聞く
Voice 3

1929年生まれ

新井俊一さんの証言



新井俊一さん／祖父の代に硫黄島へ移住し、硫黄島で漁業を営む父のもとに生まれた。疎開命令時は島に残留。10月に内地へ疎開。戦後、潜水士として下田などで活躍。

トビウオ漁なら 満月の夜を狙え

「満月の夜が一番いいんだよ。5～6月、トビウオの産卵の時期だね。一晩で1万とか2万尾とか、そりゃもうバンバン獲れた」。

そう語るのは新井俊一さん。西海岸にある東部落の東山で漁師をしていた父をもち、男6人女4人という10人兄弟のひとりだった。小学3年くらいになると、学校のない日曜日にはカヌーで祖父、父と一緒に漁の手伝いに出た。

「マグロやサワラは一年中獲れてたよ」

と目を細める新井さん。内地からの運搬船も20艘ほどがやってきて、次々と水揚げを運んでいく。家にはムロアジを加工してつくるムロ節の工場もあり、家業である漁業は順調だった。「うちでは牛も飼っていてね、“島で一番乳が出る”って言われてた牛」で、登校のたびに5升(約9ℓ)もの乳を搾って、軍に納めていた。学校に通いながら家業を手伝っていたため、「遊びというものはほとんどやらなかった」新井さんだが、「部落対抗の運動会は楽しかったですよ」と振り返る。

「島をあげての年1回の運動会でね。家族総出で、全部落対抗」。新井さんは運動会で“逆立ち100m競走”で優勝したこともあるという。

そんな平和な日々、戦争という暗雲が近づいていく。新井さんが元山部落にあった島内唯一の旅館、太平館で働いていた、1944(昭和19)年のこと。6月15日に激しい空襲を受けた硫黄島で、軍部から全島民へ内地への疎開命令が出たのだ。

ただし、扶養家族がなく、健康な成年男性は軍属として残るように、という内容。強制疎開のための船は3回出港した。けれど、新井さんは疎開船に乗らなかった。そして家族がその船に乗ったこと、3回のうちのどの船に乗ったのかさえ、知らなかった。家族はみな疎開。自分はただひとり、硫黄島に残された。

「父親の兄貴、伯父さんに聞きました。親父を帰さないと家族が困るから、お前が残ったほうがいいのではないかと」。

祖父の代から硫黄島暮らしの新井さん一家。生活基盤のない内地で、しかも戦時下の疎開先で家計を支えていくには、大

黒柱であり、稼ぎ頭である父親が必要。硫黄島から疎開したとして、見知らぬ土地で誰が一家8人全員を支えるのか。

その選択が苦渋に満ちていたことは、想像に難くない。

空中戦に艦砲射撃。 残留した島で見た景色

「太平館には師団長が入る壕、奥行きが3m、幅が2mぐらいで土を被せたのがあり、僕はそこへ避難していました。飛行機が毎日30機くらい、コンソリーデーテッド24という飛行機が毎日のように空襲にきて」と、当時を振り返る新井さん。「当時、太平館は島の司令塔になっており、二連砲や三連砲が50機くらいあり、少尉から中尉の方々が50人くらい、いつも会議をやっていました」。

また、太平館には残留させられた島民、10人ほどがいて炊事を担当していた。新井さんも太平館で炊事、洗濯などをしていたので、市丸利之助少将にも会ったこ



戦後、硫黄島を何度も訪れているが、「変わってしまった」という

とがあるという。

「空中戦も見ましたがすごいですよ。グラマンは羽根がきれいで銀色。ゼロ戦は機銃が羽根に2門ずつ、操縦桿のところにも2門、合計6門付いていました」。

内地へと脱出。 下田で家族と再会

米軍からの攻撃が激化するなか、10月になって太平館の青木社長が「SB(海上トラック軍用船)がこれからすぐに内地に向かって出る。これを逃したら永久に帰れなくなるぞ」と言い、新井さんは着たきりのまま南波止場へ向かった。SBは午後3時頃に硫黄島を出港。父島には寄らず、直接内地を目指した。

「北硫黄まで来たら潜水艦がおり、援護についてきた駆逐艦が2艘で爆雷攻撃をやってくれました。潜水艦からも魚雷が発射されたが、たまたま不発弾で船体の横に乗り上げたそうです」。

駆逐艦の援護はそこまでで、その後は単独で航行。「SBは戦車を運ぶ船だったが、その中には硫黄島から乗せた負傷兵が大勢乗っており、痛いよう、苦しいようとうなり声をあげていました」。

その後、八丈島近辺で激しい時化にあうが、なんとか下田経由で横須賀に到着。行くあてなく、横須賀の旅館や寺で2か月ほど過ごしていた新井さんのところへ母親が迎えにきた。半年ぶりの再会だった。

いま、下田でのどかに暮らす新井さんは、「せめて硫黄島に自由に帰れるようになってほしい」と語った。

日本髪に着物の開拓時代から 洋装が当たり前の時代へ

冬でもコート不要 島民たちの衣服事情

海洋性気候の最北端のひとつに位置する硫黄島は、年間平均気温は24℃。一年中で最も寒いといわれる2月でも最低気温が12℃程度と温暖だ。そのため、通気性のいい木綿などの衣服が好まれ、真冬でも袖なし綿入れのチャンチャンコのようなものを着る程度だったという。

数少ない残された写真を見ると、明治の開拓初期にはしっかりと日本髪を結った着物姿の女性がいる。その後、日本髪は減っていったようだが、男性も記念写真を撮るようなハレの日には、着物を着ていた様子が分かる。

ただし、普段着としては簡易なものが多かったようで、男子は木綿の着物に兵児帯(子供のしごき帯)、禪という時代が長く続いたが、次第に洋服、運動靴に変わっていった。

女子も当初は木綿の着物に伊達巻だったが、簡単に身につけられる帯結びに変



初期に硫黄島へ渡った開拓者の親子。きちんと着物を着こなしている
↑男子は着物に袴をつけることも。昭和10年代になると洋装が増える
←小学校の入学式。節目の際には、内地から服や靴を取り寄せて正装した

わり、その後、簡易服(カンタン服ともいう。ワンピースのようなもの)に。

履物はタコの木葉を編んでつくった草履から、本土から届けられる運動靴へと変わっていった。

1940(昭和15)年~1943(昭和18)年の平均気温および降水量

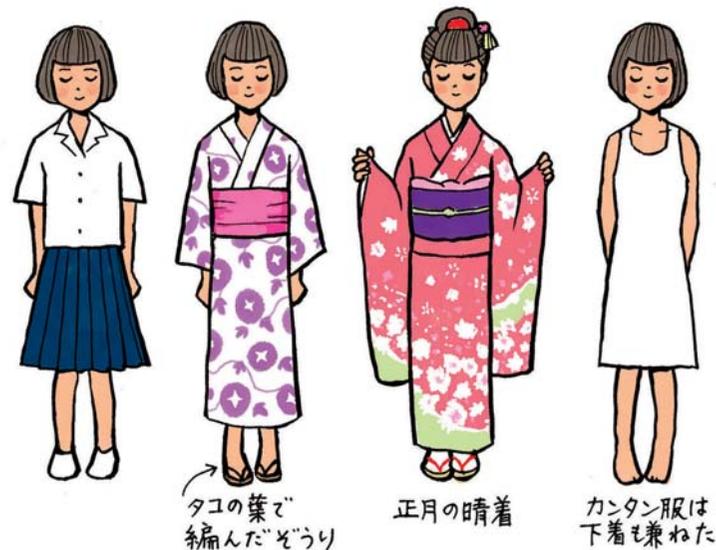
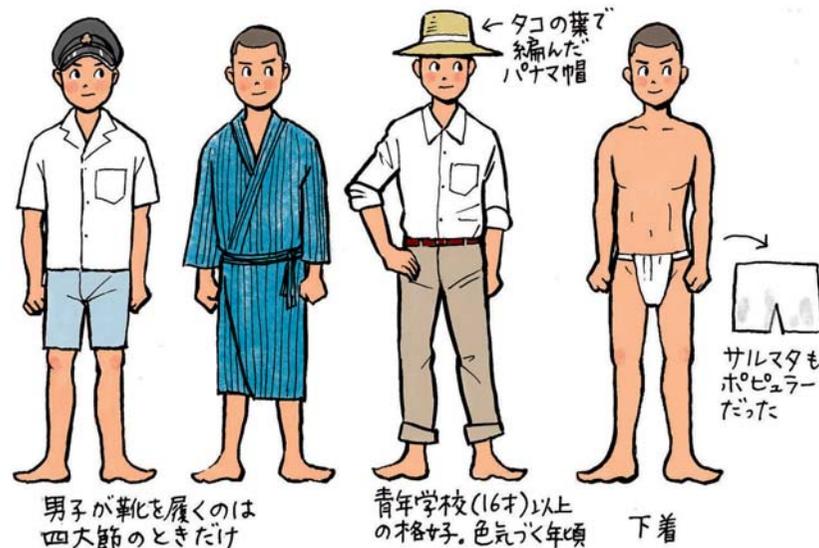
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
気温(℃)	18.5	18.5	20.4	22.4	24.6	27.0	27.6	27.2	27.1	25.8	23.9	20.9	
降水量	最大	100.9	32.3	75.9	274.6	219.0	189.5	588.9	204.4	135.1	507.1	258.3	112.0
	最小	32.8	21.9	14.2	42.5	85.0	29.8	32.8	79.0	50.8	22.6	98.9	46.7
	平均	60.3	28.9	47.9	120.5	124.2	94.2	187.1	125.2	93.6	198.1	169.9	89.5

出典：「硫黄島関係既存資料等収集・整理調査報告書」(財)都市調査会 1982年

洒落者が多かった硫黄島

本土からはるかに離れた島であっても、定期船が運航していたため硫黄島でも内地の食料、衣料品はきちんと手に入った。

元旦、紀元節などの節目には、男性も女性もきちんと正装し、着飾ったという。



島民の 声

を聞く
Voice 4

1921年生まれ

佐々木ヨネ子さんの 証言

結婚の翌年に疎開 身重の体で内地へ

青ヶ島から硫黄島へ入植した父、広江卯八さんと、硫黄島生まれの母、ツヤさんとの間に生まれた佐々木ヨネ子さん。硫黄島で生まれ、尋常高等小学校から青年学校へ進学。卒業後、父島の叔母宅で2か月ほど家事手伝いをし、東京へ上京した。「東京では銀座松屋専属の裁縫所で働きました。5年という約束でしたが病気になったため、3年ほどで硫黄島へ帰ってきました。戦争中でしたが激しくなかったの、病気が治ったら東京へ戻るとつもりでした」。

ところがその後、戦況が悪化。東京へは戻れなくなり、1943(昭和18)年に兄や叔母の勧めで持丸信雄さんと結婚する。信雄さんは長男だったため、舅姑とも同居。楽しい生活を目指し始めたところで、軍部からの疎開命令。1年あまりの新婚生活を送った夫、信雄さんは硫黄島に残留した。この時、佐々木さんは妊娠中。

「私たちは硫黄島で最後の引き揚げでしたから、サイパンが陥落してからの引き揚げです」。だが、船に乗り込もうと浜へ行っても、飛行機が降下してきて危険だ



佐々木ヨネ子さん／硫黄島で生まれ、青年学校卒業後、父島、東京(内地)で3年ほど働く。病氣療養のため硫黄島へ戻り、1943(昭和18)年、結婚。臨月間近で疎開船に乗る。

と言われ、「浜へ行っては帰り、浜へ行っては帰りして、4日目でやっと父島行きゆたんの船に乗ることができました」。

島に残留する人たちが、懸命になって疎開する人たちを舢舨で運んでくれた。船はダルマ船で船のヘリが高いため、佐々木さんは船員さんに引っ張り上げられて、ようやく舢舨から乗り移った。

赤ん坊を背に逃げる 逃げた先でも空襲

「父島には夕方着きましたが空襲があり、トンネルの中で4日間過ごしました。やっと利根川丸が来たので、みんなその船に救命用の浮き袋を着けさせられて乗り込みました」。全員甲板に上がってくださいと指示があり、甲板で一夜を過ごした佐々木さん。すでに海の上も安全な場

所ではなく、「船は横浜に着くまで爆雷を撃ち続けていました。軍艦も一緒にいて米軍の潜水艦の攻撃などに備えて準備してました」。途中、日ごと大きくなるお腹では横になることもできず、船中ではほとんど座ったまま。「途中、潜水艦が出たとも聞きました」。

横浜へとたどり着き、目黒の親戚宅に一時世話になったが、東京都からの世話があり、石神井学園へ。その後、練馬のカネボウの社宅へ入ることができた。ここで佐々木さんは出産。8月8日だった。

「空襲警報が鳴ると背中に子供をおぶって、オムツとか着るものや軽い布団とかを油単あぶらたんに包んで首にかけて、逃げる時はそうやって逃げました」と佐々木さん。練馬には小さな防空壕しかなく、子供が泣くと探知機に入るからと、生まれただけの娘を背負い、母と一緒に山へ逃げたという。

その後、神奈川・川崎へ移るが、そこでも横浜大空襲に遭う。「川崎でも空襲、空襲で、逃げてばかりでした」と語る佐々木さん。周囲一帯が火の海になってしまい、かろうじて火が回っていなかった田んぼの中で一夜を過ごしたこともあった。

硫黄島へ帰りたい その夢はかなうのか

そして終戦を迎え、1946(昭和21)年に従姉を頼って八丈島へ。世話をする人がいて、青ヶ島の人と再婚。27年間、青ヶ島で暮らしたのち、現在は八丈島でおだやかな日々を過ごしている。

「最初の主人は、爆弾の破片がお腹の中に入って、病院で40分くらい生きていたそうですが、亡くなったと聞きました」。

持丸信雄さんは玉名山に埋葬されたと聞いたが、具体的な場所は分からない。また、佐々木さんの兄弟2人も、硫黄島に残留して命を落としている。

「長男の孝一はどうなったか、分かりません。弟の徳治は玉砕ぎょくさいのあった時はまだ生きていたみたいですね」。

徳治さんは仲間4~5人と一緒に北硫黄島へ逃げようと、浜に集まった。しかし、何も持っていないことに気づき、「明日の夕方、ここへ缶詰やお米を持って、また集まろう」とみんなで約束をした。「次の日に約束通りに集まったのは、原栄吉さんの息子さんだけだったそうです」。

戦後の遺骨収容の際、壕の中から「広江徳治」と名前の付いた水筒が見つかった。その水筒は当時、存命だった母に一度預けた後、水筒のそばにあった遺骨と一緒に千鳥ヶ淵戦没者墓苑へ納骨した。

「硫黄島へはもう帰れないでしょうね。遺骨収集もまだまだですね。兄の遺骨が帰ってくるのは、いつになりますかね」。

硫黄島に帰れたら何をしたいかと尋ねると、「アナナをもう一度食べたい。八丈島でもつくっているけれど、硫黄島のとはやっぱり違うんです」と少しはにかんだ。



八丈島にて。中央が佐々木ヨネ子さん、右が娘のさち子さん、左はやはり硫黄島出身の佐藤富代さん。八丈島には硫黄島出身者が多く暮らしている

島民が協力、団結した青年会と世話掛のおかげで生活が豊かに



写真中央で子供を膝で挟んでいるのが青木千蔵。
硫黄島の初代、助役収入役だ

島のなかはもちろん 対外的にも活躍した青年会

1911(明治44)年、硫黄島に結成されたのが、在郷軍人分会と青年会だ。在郷軍人分会は軍人意識の高揚と強固な団結を目的とし、60名が参加。青年会は青年思想の健全な育成を目的とし、青年会員は70名。どちらも島の有力者が会長に就任し、活動を開始した。

そして結成の翌年8月、小川琢治を団

長とする東京地学協会の伊豆南方諸島学術調査団(一行12名)が硫黄島を訪れた際、次のような記録が残っていることから、硫黄島青年会の歓待ぶりや団結力がうかがえる。

「青年会によって豚一頭をつぶした料理、スイカやパイナップルなどがふるまわれ、とても感謝した。また、調査団を歓迎するアーチのそばには立札があり、わからないことがあったら「胸に△印(在郷軍人)、○印(青年会員)」に尋ねるようにと書いてあった」

1918(大正7)年には、女子青年団の前身、処女会が創設された。このほか、1939(昭和14)年には愛国婦人会が会員165名で創設。1939(昭和14)年には警防団が結成され、団員569名もの規模になった。

運動会では音楽演奏。 強かった野球チーム

青年会は、学校の運動会でブラスバンドの演奏をするなど、島内行事に参加したり、来島者の対応にあたりたりしていたが、昭和に入ってから島内の飛行場造営に参加することもあった。

また、青年会には野球チームがあり、在郷軍人分会、学校職員、部落ごとのチームと対戦していた。1941(昭和16)年頃から千鳥が浜の第一飛行場を建設するためにやってきた建設会社の労働者、海軍兵士が多くなり、野球のチームも増えて、さかんに交流戦を行っていた。

One Point解説

青年会って何？

20～30歳代の青年男女によって、地域ごとに組織される団体。もともとは各地域の祭礼行事や自警団的活動などに関わる団体だったが、大正時代には青年会(青年団とも呼ばれることもある)のほか処女会(女子青年団)も組織されるようになった。

昭和に入ると、青年会も国策へ協力しなければならなくなり、戦局が悪化するにつれて、各地の青年団は学徒隊に編入されていった。終戦後も日本各地で結成され、全国組織もある。

島の行政機関として 世話掛が就任

硫黄島が1891(明治24)年に日本領土になってから20年以上経った1914(大正3)年、島の行政機関として世話掛がおかれることになる。町村制の適用外だったために、島の行政関係の仕事は世話掛が統括した。

小笠原島庁から派遣された世話掛が役場で執務し、久保田拓殖合資会社から助役収入役が就任した。

その後、1940(昭和15)年3月30日、勅令により、硫黄島が村として認められ、町村制が施行されることとなった。そのため、世話掛制度は廃止に。初代村長は島庁の後継機関である小笠原支庁から派遣された佐山好一である。

硫黄島の通信事情

島の開拓以来、島外との通信手段は郵便のみ、という時代が長く続いた。明治後期～大正初期には人口が急増したため、郵便物の需要も増加。1916(大正5)年には定期船が入港するたびに郵便物の受配・発送取扱業務が大変なため、硫黄島に郵便局を臨時で設置することや、航海便の際に局員を派遣出張させることを、申請したが、許可が下りなかった。

1939(昭和14)年、南方海域の観測網強化のために中央气象台硫黄島観測所が設置されると、翌年3月に観測所の無線局が硫黄島公衆無線電報取扱所となり、ようやく島民は必要に応じて電報を打てるようになった。

宗教、手づくりの新聞など 島の暮らしを守ったものたち

島民に親しまれた神社。 秋の祭りは一大イベント

硫黄島には寺はなかったが、日蓮宗、浄土宗、天理教、そして青ヶ島系の巫女に類する信仰があった。また、猿田彦大神、硫黄島神社の2つの神社もあったが、

僧侶も神主もいなかったので、世話掛が代行した。

硫黄島神社は、島の鎮守として天照大神あまてらすおみがご神体とされていた。もともとは西海岸近くにあったものを、1922(大正11)年に元山のタマナ林のなかに移転した。毎年9月10日には、氏子総代13名が協議機関となり例大祭を執り行った。この例



↑戦後再建された硫黄島神社の鳥居
←島民に親しまれた硫黄島神社にて。秋の例大祭は島民が集まるため、島民同士の交流の場としても活気にあふれた

大祭では、力自慢の若者がぶつかりあう奉納相撲もあり、軍配ぐんぱいや力士の化粧どんす綴子などは内地からわざわざ取り寄せたもので、綴子の華やかな刺繍は見事だったという。呼び出しを先頭にして相撲基句を歌いながら土俵入りする様子は「国技館に出てもひけをとらない」と評した人もいたほどだった。

また、日照りが続く時は、硫黄島神社の前の広場に島民たちが集まり、たき火をしながら大きな声で雨乞いをした。

最新情報を島民に伝えた。 有志が始めた島内新聞

ラジオが日本全国に普及した1931(昭和6)年、硫黄島でも学校にラジオが設置された。これは定期船の船長が厚意で行ったもので、船の無線技師を学校に派遣。蓄電池によるラジオ受信機を設置し、校庭の高い丘にラジオ塔を建てさせた。

このため、それまで本土からの情報入手が困難だった硫黄島で、最新のニュースを聞くことができるようになった。さらに、学校職員が自主的に始めたのが「日刊島内新聞」。夜7時、9時のラジオ放送でニュースを聞き、その内容をガリ版印刷で新聞としてまとめ、放送の翌日、各部落長の家や有力者の家庭に届けたり、部落の掲示板に張り出したりと、島内に最新情報を届けた。

このため、本土から約1,250km離れた硫黄島でも、本土と同様にニュースを知ることができた。この島内新聞は以後、10年間継続された。

One Point解説

硫黄島に警察はあった？

硫黄島には1910(明治43)年に巡査在勤所が置かれ、巡査1名が配置された。その後、1916(大正5)年には巡査2名に増員されているが、たとえ「犯罪を犯しても、そう簡単には逃げられない」環境の島だから、犯罪率という面では総じて平和な島だったという。



父島、母島、あるいは八丈島を含む伊豆諸島からの入植者が多かったため、様々な文化が硫黄島にあった

民謡『硫黄島シヨメ節』

1987(昭和62)年2月、東京都指定無形民俗文化財(民俗芸能)に指定された民謡に、『硫黄島シヨメ節』『硫黄島トントコ節』がある。『硫黄島シヨメ節』は

わたしゃ硫黄島 噴火島生まれ
胸に煙りは絶えはない
ハイ、シヨメ、シヨメ

と歌うもの。「シヨメ、シヨメ」という特徴的な唄ばやしに類似していることから、硫黄島よりも歴史が古い「八丈島シヨメ節」の影響で生まれたと推察できる。

これは硫黄島に八丈島出身者が多かったためだろう。

娯楽の少ない島で、正月は年に一度の楽しみだった

12月の定期船入港から正月の準備が始まる

硫黄島で大人も子供も心待ちにしていた2か月に一度の定期船。そのなかでも12月の定期船は特別な存在だった。それは正月準備用の品々が積み込まれているから。凧の材料、羽根つきの道具、カルタ(百人一首)などは子供たちのお目当て。大人たちはおせち料理の材料や晴れ着などを買い込んで、正月の準備にとりかかる。

硫黄島では正月は仕事も家事も一切しないため、大人の女性はおせち料理をつかって屋敷の大掃除。大人の男性は餅をつき、豚や鶏をつぶしてさばく。ただし、冬といっても硫黄島では12月でも平均気温が20℃以上あるため、塩漬けにして保

八丈島から伝わった? 為朝凧

硫黄島で人気が高かった「為朝凧」。これは『八丈実記』の著者で知られる近藤富蔵が源為朝をモデルに図案化したもの。源為朝は源頼朝・義経の叔父で身長2mを超える大男、そして弓の名手だったという。保元の乱(1156年)で敗れたのち、八丈島へ来たという伝説があり、為朝凧は八丈島で古くからつくられていたという。

硫黄島には八丈島からの入植者も多く、彼らが硫黄島へ持ち込んだのではないかと考えられる。

存。大晦日の夜には漁に出かけ、元旦用の刺身に。子供たちも饅頭や汁粉用の豆(手入れなしでも毎年実ることから、無精豆と呼ばれた)を拾い集めたり、漁でエサとなるオオガニを捕まえたりと忙しい。

また、正月の凧上げで人気の為朝凧は、島の器用な青年たちの手づくり。島でとれた竹で骨組みをつくり、マニラ麻やサイザル麻の繊維で編んだロープをつなげ、畳一畳もの大きな凧を仕上げた。

凧揚げに羽根つき。カルタの対抗戦は白熱

このように準備万端で迎える正月は、大人も子供も晴れ着に着替え、大正小学校に集まった。校庭ではいくつもの大きな凧が大空に揚がり、壮観だったという。羽根つきを楽しむ女子も多く、また、百人一首を使ったカルタ大会も盛り上がった。カルタ大会の勝者には豪華な景品(貴重な食料など)が出るため、12月中から特訓をする人も多く、名人同士による白熱した戦いが繰り広げられたという。

また、大人の男性は朝から夜まで宴会を繰り広げ、島のサトウキビでつくったアルコール度数40度以上の焼酎、「硫黄島正宗」と豪華な料理に舌鼓を打った。女性たちも正月はそれぞれの家に集まり、カルタとりやすごろく、おしゃべりを楽しんだ。

お手製の凧や羽子板

正月につきものの凧揚げの凧、羽根つきの羽子板は、ほぼ島民の手づくり。そのため、手先が器用な人のもとには正月のはるか前から依頼が入り、子供たちはできあがるのを首を長くして待ったという。



島民の声を聞く Voice 5

1931年生まれ

原ヤイ子さんの証言

疎開先で見た東京大空襲

「マグロ船のようなものに乗せられて」原ヤイ子さんが硫黄島から疎開したのは3回の疎開船のうちの最後、第3便だった。両親兄弟、両親父母、そして曾祖母も一緒だった。内地へ着いてからは、港区芝の増上寺、杉並区の西方寺に家族が分散させられた後、なんとか親戚のつてをたどり、葛飾の堀切菖蒲園に小さな家を買った。

「私は6年生で引き揚げて、内地で高等科に入ったんですが、すぐに学徒動員。毎日、工場で働きました」。

配給はサツマイモの芯、サンマ1匹など、十分でなく、千葉や埼玉まで買い出しに行かなければならなかった。1945(昭和20)年3月10日の東京大空襲も、母親と埼玉へ買い出しに行き、家に帰る途中だった。「千住大橋のところで人が焼けだされて、たくさん浮いているのを見ました」。

そしてこの空襲のさなか、硫黄島から一緒に疎開した曾祖母と生き別れてしまう。その後もあちこちで空襲に遭い、終戦後の1946(昭和21)年、東京都の幹旋で栃木県的那須へ開拓団として入った。2人の祖母は既に東京で亡くなっており、両親と兄弟、祖父と一緒にだった。



原ヤイ子さん／硫黄島・玉名山部落生まれ。旧姓村田。強制疎開後、開拓団として那須へ入植。入植後、強制疎開時に硫黄島に残留し、捕虜となって生き延びた原光一さんと結婚。

雪深い荒野で途方に暮れた開拓

「確か3町歩」という土地から始まった開拓。「黒磯まで汽車で来ましたが、そこからここまでは1日2本のバスだけ」と原さん。見渡す限りの荒れ地で、けもの道がうっすらある程度という場所だった。

「こんなところに人間が住めるのか、と思うほど。本当に何もなかった」。

実はこの場所、先に八丈島から疎開した開拓者が入っていた。八丈島からの疎開者は最初、塩原に開拓で行ったがうまくいかず断念。その後、那須へ移ってきたが、ここでもなかなか開拓が進まず、餓死者も出て、那須を出ていく人も多かったという。

「私たちは入植した当時は、八丈の人たちの共同宿舎で生活をしていました」と

いうが、原さん一家には入る部屋がなく、当初は納屋を借りての生活だったという。「家はそらの木を切って、仲間で手づくり。だから冬は雪が吹き込んで、もう本当に寒かったですよ」と振り返る原さん。南の島で生まれ育った身には、雪の多い那須の冬はことさらに厳しく感じられた。

電気がないため、杉の根に生えるヒゲを燃やして灯りとした。学校もなく、開拓民は差別を受けた。「何か物がなくなると、開拓民のせいだと言われました。意地悪されましたね」と原さん。

「食べるものもないから、セリの根っこでもアザミの根っこでも、そらのものをおかゆに入れて食べました」。それでも食べていくのに困って、大切に持ってきた着物を食べ物と交換することもあった。「あの頃のことは、思い出したくもないんですよ」。

野菜づくり、養蚕、酪農と様々なことに挑戦しては、1軒また1軒と開拓を断念し、那須を出ていく人が続くなか、入植から3~4年が経って、政府から個人に貸付金が出ることになり、ようやく牛や農機具などを用意することができた。「それでうちでは牛飼いをやり始めたんです」。

硫黄島出身の夫と那須で結婚

硫黄島出身の夫、光一さんと結婚したのも、この那須でだった。「硫黄島にいた頃は、主人のことは知らなかったんです。主人の弟が私と同級生でしたけど」というから、縁とは不思議なもの。

原光一さんは1925(大正14)年生まれ。硫黄島の強制疎開時、島に残置させられ、地上戦に参加させられた島民の一人だ。

「主人がいた壕の隊長さんが、主人に言ったそうです。みんなが手榴弾でどんどん死んでいくなかで、“せめて一度、お日様を拝んでから死になさい”って。それで自分は死ぬ覚悟で外に出たんだと」。

壕の外へ出た光一さんは米軍の捕虜に。そして壕に残った隊長、他の部隊の人たちは全員手榴弾で自決した。

捕虜になった光一さんは米国本土へ行き、待遇のよさに驚いたという。「主人は綿をつくっていたそうです。捕虜でも働けば給料をくれるし、働きたくなければ働かなくてもいい。アメリカ人が親切で驚いたと」。終戦後、日本に戻った光一さんは、姉を捜して岩手に行った後、那須でヤイ子さんと出会い、結婚した。

ヤイ子さんは言う。「あの頃は捕虜になることは恥ずかしいことでしたが、ほとんどの人たちが死んでしまったことを考えればよかったです。主人の弟も軍属として島に残りましたが、どこで亡くなったのかもわかりません」。



故郷から遠く離れた那須でめぐりあい、結婚した原光一さんとヤイ子さん

北硫黄島 急峻な山に海鳥が舞う

北硫黄島の位置と概要

硫黄列島の最北端。硫黄島から北に約75km、父島の南南西約207kmに位置する北硫黄島。島の形は南北に長い楕円形で、南北約3.5km、東西約2km、面積は5.56平方km。南に標高792mの榊ヶ峰、北に標高665mの清水峰があり、島の周囲はほとんどが海食によってできた急峻な崖で囲まれている。

北硫黄島は火山活動によって生まれた玄武岩の成型火山島だが、浸食が進んでいて噴火記録、噴気地熱現象はない。

1899 (明治32) 年 北硫黄島の開拓開始

1889 (明治22) 年、田中栄二郎が硫黄採掘の調査と漁業のために硫黄島を訪れた際、母島へ戻る途中で北硫黄島にも寄り、現地の状況を確認。母島へ戻ってから「北硫黄島は土地が肥沃で、水も得られる」と報告をした。

この報告を聞いた石野平之丞が1896 (明治29) 年に北硫黄島に上陸。小笠原島庁の許可を得て、1899 (明治32) 年に母島から仲間とともに北硫黄島に移住し、北硫黄島の開拓を開始した。

北硫黄島には東海岸に石野村、北西海岸に西村という2つの集落が形成された。これは絶壁に囲まれ、接岸が困難である北硫黄島の中では、波を遮る効果がある裾礁に囲まれている石野村と西村が地理的に有利だったからと思われる。また、石野村と西村は小道で結ばれていた。

産業はサトウキビ栽培 カツオドリ猟、漁業

開拓者たちはまず石野村を中心にサトウキビ栽培を始め、やがてヘゴ、ショウガ、粟などの栽培へと手を広げていく。また、副業としてミズナギドリ、カツオドリなど、海鳥の羽毛、干し肉を父島や内地へ出荷していた。

ほかにカヌーによる漁業も行われていて、カツオなどを干物や節に加工して販売していた。



島全体が切り立った崖に囲まれている北硫黄島。大きな入江がなく、波が高いため、接岸が難しい

こうした農産物・水産物類は、硫黄島と同様に年6回の定期船で本土に運ばれ、島民に収益をもたらした。1905 (明治38) 年6月までに北硫黄島から本土への移出額は8,032円。逆に本土から北硫黄島への移出額は575円。このことから北硫黄島の経済が潤っていたことが分かる。

移住者は年々増えて、1915 (大正4) 年の最盛期には、212人の島民が居住。1902 (明治35) 年には石野村に私設の小学校が開校しており、1918 (大正7) 年には北硫黄島青年会が結成されるなど、社会生活が充実していった。

北硫黄島では干潮時に、サザエを獲ることもでき、家庭で食したほか、昭和10年代には貝殻をボタンの材料として、身を缶詰として内地へ出荷した。

1944 (昭和19) 年、戦況の悪化により17世帯90名が強制疎開。現在は無人の島になっている。

Point解説

戦後、発見された石野遺跡

1920 (大正9) 年、植物調査に訪れていた東大教授に、石野平之丞から磨製石斧3個が寄贈された。北硫黄島から出土したとされるこの磨製石斧は、マリアナ諸島の磨製石斧との関連性が指摘され、島の返還後の遺跡調査の端緒を開いた。

1991 (平成3) 年、東京都の遺跡調査団が北硫黄島を訪れ、8世紀～15・16世紀頃に残されたと見られる祭壇や墓地跡、石器や土器などの生活用品を発見。これが石野遺跡である。石野遺跡で発見された遺跡や遺物は、日本本土の縄文・弥生文化のものとは異なり、ミクロネシア文化圏の影響を受けているものと推定されている。

北硫黄島からの移出品および移出額

品目	移出量	移出額
赤砂糖	462俵	6,006円
鳥毛	17俵	981円
ショウガ	66俵	522円
白下糖	16樽	192円
粟	35俵	140円
手羽	63個	75円
木耳(キクラゲ)	3俵	45円
糖蜜	5樽	39円
赤豆	3俵	12円
ヘゴ	100俵	10円
野菜	10俵	10円
合計		8,032円

出典：「新硫黄島視察談 (承前)」佐藤傳藏 『地学雑誌』 17巻10号 1905年

北硫黄島で見られる海鳥

人が住まないために、手つかずの海鳥の楽園と化している北硫黄島。シラオネツタイチョウ、シロアジサシ、アカオネツタイチョウ、アカアシカツオドリといった貴重な海鳥が生息し、野鳥愛好家などから注目されている。



←北硫黄島でよく見られるアホウドリ
©Lieutenant Elizabeth Crapo, NOAA Corps

↓ミズナギドリ的一种
©Lieutenant Elizabeth Crapo, NOAA Corps

島民の声を聞く Voice 6

1934年生まれ

山崎茂さんの証言

北硫黄島には川も湧き水もあった

硫黄島(硫黄列島の真ん中という意味で、中硫黄島と呼ばれることも)で生まれた山崎茂さん。父親の仕事の都合によって1歳半で北硫黄島へ移住し、小学校へ入学。その後、再び硫黄島に引っ越し、硫黄島の小学校に通うものの、3年生だった1943(昭和18)年12月、北硫黄島へ引っ越し。戦前の2つの島を知る人物だ。

「渋川と言ってね、ちょうど広がっているところ。ここが段になっていて、ここに水が流れるんです」。

北硫黄島の水事情を話す山崎さん。硫黄島には川はなく、噴煙の蒸気が岩場で冷やされて水ができる「銀明水ぎんめいすい」がある程度で、人々の暮らしに十分な水はなかったが、北硫黄島では川があり、人々はタンクから水を汲んでいたという。

「石の割れ目からバタバタ垂れる。下がコンクリでタンクができていて、そこからみんな水を汲んでいましたね」。

ただし、渋川は途中で鉞物を通ってくるため、名前の通り、そのまま飲むと渋い味がしたという。たまに海鳥の卵を焼いて食べたり、海鳥のミズナギドリみずなぎどりの肉を食べたりと、北硫黄島らしい食生活も

あった。ムロアジの加工工場、サザエの缶詰工場もあり、北硫黄島でも食品加工など会社が経営されていたことが語られる。

攻撃が止んだ夜間に北硫黄島は全員疎開

北硫黄島の住民には全員疎開の命令が出た。「引き揚げる時は一日始終(米軍から攻撃を)やられて、夜になったら止めたもんだから、みんなで最初は山の中に逃げた」。しかし、父島への疎開船を待つ間に、1歳下の子供が亡くなったという。

大きめの漁船に全島民90名が乗り組み、父島へたどり着いた後も、しばしば行われる空襲の中、内地までの疎開船がなかなか出港できず、1か月ほど待たねばならなかった。その際の食事は1日1個のおにぎり。北硫黄島との暮らしとは全く異なる状況がこの後も続いた。

山崎茂さん／硫黄島生まれ。北硫黄島と硫黄島の両方で暮らした経験があり、疎開時には北硫黄島に住んでいた。1999(平成11)年～2011(平成23)年、遺骨収容に参加。



南硫黄島 絶壁に囲まれた無人島

東京島しょ部の最高峰 硫黄列島南端の島

南硫黄島は硫黄島の南約60km、東京都心からは南に約1,300kmに位置し、面積は約3.5平方km、周囲約7.5kmの火山島。高さ100～200mの険しい絶壁に囲まれた円錐形の島で、南硫黄島の標高916mは、東京都内島しょ部の最高峰となる。火山島であるが、有史以来火山活動の記録はない。ただし、南硫黄島の北東約5kmに海底火山があり、これまで何度か新島を形成する噴火が記録されている。

1889(明治22)年、南硫黄島の海岸において漂着者3名が発見される事件があり、1895(明治28)年以降、硫黄島へ来航する定期船は、年に一度、南硫黄島まで延航し、島の周囲をまわって漂着者の有無を確認するようになった。

1891(明治24)年、硫黄島、北硫黄島と



よく晴れた日には、硫黄島から南硫黄島を見ることもできる

同時に日本の領土になる。1911(明治44)年には海軍水路部と陸地測量部が三角点を設置。東京府小笠原島庁(1926(大正15・昭和元)年に小笠原支庁)の所管となる。だが、淡水がなかったことなどから南硫黄島への移住者はなかった。

自然調査を経て世界自然遺産へ

1935(昭和10)年、1936年(昭和11)年に南硫黄島の自然調査が実施され、新種、新変種、新分布の植物が発見された。

硫黄島・北硫黄島と同様、戦後は米軍の施収権下に入り、1968(昭和43)年に日本に返還される。1972(昭和47)年、南硫黄島全体が国の天然記念物(天然保護区域)に指定され、原則として学術調査などの理由以外で上陸ができなくなった。また1975(昭和50)年には、日本初の原生自然環境保全地域にも指定され、1982(昭和57)年に環境庁による本格的な総合調査が行われた。

その後、2007(平成19)年に東京都と首都大学東京が合同で自然環境調査を実施。キバサナギガイ属などの新種とみられる貝類4種類が発見された。この南硫黄島、北硫黄島を含む小笠原諸島は、2011(平成23)年、世界自然遺産に登録された。

戦火・地上戦

太平洋戦争勃発。 その時、硫黄島で何が起きたか

日本の苦しい決断、 真珠湾攻撃

1941(昭和16)年、日本時間の12月8日未明、183機の第一次攻撃隊がハワイに向けて航空母艦から出発。世にいう真珠湾攻撃、太平洋戦争の始まりである。宣戦布告に先んじた奇襲に米軍は混乱し、甚大な被害を被るが、アメリカ国民の戦意は一気に高揚した。それは、開戦と同時に大打撃を与え、戦争意欲を奪おうとした日本軍の思惑とは正反対の結果だった。

そもそも、当時のアメリカと日本の間



休日を楽しむハワイの米軍を襲った突然の戦火は231機の戦闘機と8隻の戦艦(のちに6隻が戦線復帰)を奪った。日本が目標としていた空母はこの日停泊しておらず、それも後の戦況を左右する

には戦闘力に大きな差があり、太平洋戦争の勝利など、陸軍の試算でも無謀な挑戦だったという。それでも日本軍が真珠湾攻撃に踏み切った理由とは何なのか。

この時期、日本は日中戦争のさなかにあった。資源に乏しい日本は短期決戦を望んでいたが、状況は予想を裏切る長期戦にもつれ込み、戦線は拡大の一途をたどっていた。いっぽうアメリカは、この戦争において中立の立場を取っていたものの、日本が「満洲」を含む中国、さらに東南アジアをも含む大東亜共栄圏構想を示唆すると強く反発。また、同時期にヨーロッパで起きていた第二次世界大戦で怒濤の進撃を続けるドイツ、イタリアと日本が三国軍事同盟を結ぶに至ると、いよいよ日本に対し石油や鉄の輸出禁止という経済制裁に出るのである。

中国との戦争中に燃料を失えない日本は制裁の解除を求め交渉を試みるが、1941(昭和16)年11月、アメリカ国務長官ハルによって突きつけられた最後通牒は「中国・「満洲」・仏印からの無条件撤退」「蒋介石政権の支持」「日独伊三国同盟の破棄」などというものであった。これらを受け入れることは、事実上、日本が日露戦争以前の状態にまで戻ることを意味した。



ミッドウェー沖にて、炎上傾斜する「三隈」。太平洋戦争で最初に失われた日本海軍の重巡洋艦となった。この時、日本軍は「加賀」「蒼龍」「赤城」「飛龍」と4隻もの空母を失っている

これによって日米の交渉は決裂し、時の首相・東条英機はついに日本海軍による真珠湾攻撃を決意したのだった。

快進撃に待ったをかけた 2つの激闘

真珠湾とほぼ同時に攻撃したマレー半島の戦いでも勝利を収め、日本海軍は破竹の勢いで進撃を続けた。1942(昭和17)年1月にはマニラ、2月にはシンガポール、3月にはジャワ島…、4月までには東南アジア・西太平洋のほとんどを手中に収めることに成功する。だが、その勢いは6月のミッドウェー海戦でびたりと止まった。

ミッドウェー海戦は、米軍による日本本土空襲の拠点、ミッドウェー島を奪うために仕掛けた戦いであった。しかし日本軍の計画は見透かされ、暗号は解読され、待ち伏せしていた米軍の攻撃によって空母4隻と多くの航空機を喪失するという壊滅的な打撃を受けてしまう。

また8月から翌年2月まで消耗戦が続いたガダルカナル島での戦いでは、圧倒的な兵力の差と飢えや疫病によって25,000人以上の命が失われた。この頃から米軍は潜水艦を投入して日本の補給船を襲い、武器や食料など前線への物資補給を絶つ作戦を展開している。

南方における 戦局の悪化

ミッドウェー、ガダルカナルでの惨敗によって、明らかに風向きは変わっていた。しかし大本営発表はこれらの敗戦を国民に正しく伝えることをせず、以降情報にたびたび虚飾を加えるようになる。そのため現実を知らない戦地の指揮官は誤った情報をもとに作戦を立てることとなり、次々と失敗が重ねられていった。

また、ミッドウェーでの敗戦以後日本は慌てて空母の増産に乗り出したが、物資や人員の不足でままたまならなかった。いっぽう、真珠湾攻撃を受けたアメリカは本土で着々と準備を進めており、日本とアメリカの戦力差はますます開いていくことになる。

そんな不利な状況下、日本軍は1943(昭和18)年3月アッツ島沖海戦、1944(昭和19)年マリアナ沖海戦、サイパン島およびグアム島での戦闘と厳しい戦いを展開。いずれも敗戦に終わっている。

そして同年10月のフィリピン・レイテ島での戦いにおいて戦力のほとんどを使い果たした日本は、とうとう航空機での体当たり作戦「特攻」を考案した。

海軍に続き陸軍が硫黄島上陸 従来とは違う作戦を準備



戦闘開始までの半年間で18kmにおよぶ地下壕を構築。兵士たちは50℃に達する地熱や硫黄ガスと闘いながら洞窟を掘り進めた。1回の作業は一人あたりせいぜい5分が限界だったという

栗林中将の着任と 硫黄島決戦前夜

マリアナ諸島を占領した米軍が次に狙うのは、日本本土を空爆する際の中継基地として最適な立地条件の硫黄島であることは明白だった。日本にとっては最後の砦であり、何としても死守せねばならない。それを誰よりも理解していたのが、1944(昭和19)年6月に硫黄島へ派遣されてきた栗林忠道陸軍中将だった。

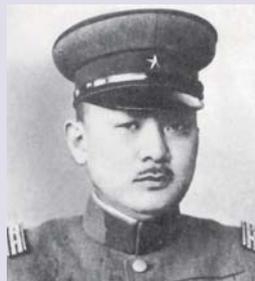
明晰な頭脳を持ち、優れた戦術家でもあった栗林中将は、敵をこちらの懐深くまでおびき寄せてから一網打尽にする戦術を練っていた。だが接近戦に持ち込むには、長時間の猛攻撃に耐えながら戦力を温存できる頑強な陣地が必要だ。そこで思いついたのが、各所に洞窟基地を築いて島全体を要塞化することだった。

彼は大本営から大量のセメントや資材を取り寄せ、専門家を呼んで急ピッチで洞窟陣地の構築を進めた。兵士たちは少し掘るたびに熱気と硫黄ガスが噴き出す過酷な環境で、防毒マスクを着用しながら日々作業に励んだ。

また当時の日本軍は軍刀と銃剣による白兵戦に重きを置いていたが、硫黄島には栗林中将の尽力で大量の重火器が運び込まれていた。数ではアメリカに劣る戦車は、地中へ隠し固定砲として使用する

TIPS:02 栗林忠道と西竹一

硫黄島の兵に慕われた2人の将校



米軍指揮官スミス中將にして「太平洋で相手とした敵指揮官中、栗林は最も勇敢であった」といわしめた栗林中將。非常に家族思いで、本土の子供たちへ直筆イラスト入りの絵手紙を送ることもあった

栗林忠道

くりばやしただみち

1891(明治24)年7月7日長野県松代生まれ

長野中学を出て陸軍士官学校から陸軍大学に進み、次席で卒業。アメリカとカナダに駐在経験があったため国際感覚に富み、圧倒的な国力を持つアメリカとの戦争には終始否定的だった。合理的な思考を持ちながら人間味にも溢れた人物で、

硫黄島着任早々住民を戦火から守るべく疎開させたり、兵士と同じ量の水と粗末な食事を摂るなどして常に部下と運命を共にする意思を示した。またよき家庭人としても知られ、硫黄島から家族に宛てて愛情に満ちた41通の手紙を出している。

西竹一

にしたけいち

1902(明治35)年7月12日東京府麻布生まれ

華族(男爵)の出であることから「バロン西」の愛称を持ち、1932(昭和7)年のロサンゼルスオリンピック馬術障害飛越競技の金メダリストとしても有名。長身の美男子で性格は天真爛漫、英語は堪能、お洒落で垢抜

けた印象の人物であった。騎兵将校だったが、のちに戦車兵に転科。硫黄島へは戦車部隊の指揮官として上陸・着任したが、胸のポケットにはいつも生涯の愛馬ウラヌス号の鬣が入っていたという。



アメリカにもファンが多かったバロン西。硫黄島の戦いでは負傷した米兵を尋問ののち、乏しい医薬品で手当てするなど、そのリベラルな気質を伝える逸話が残っている

出典: Wikimedia Commons

ことに。こうした様々な創意工夫により、後々まで語り継がれる硫黄島の強力な防衛ラインが出来上がっていった。

そして栗林中将は、いたずらに戦力を消耗するとしてバンザイ突撃を厳しく禁

じ、部下たちの頭に「敢闘の誓」なる6項目を叩きこんだ。これは、決して無意味な玉砕を選ばず、徹底的に生き抜いて最後までしぶとく闘えという明確な戦闘方針を謳ったものであった。

One Point解説

「**敢闘の誓**」とは

栗林中将が全軍に配布した「敢闘の誓」の内容は次の通り。とくに5と6は、持久戦を見据えた凄まじい決意を示している。

1. 全力を奮って本島を守り抜く。
2. 爆弾を抱いて敵の戦車にぶつかり粉碎する。
3. 敵中に斬り込んで敵を皆殺しにする。
4. 一発必中の射撃によって敵を撃ち倒す。
5. 一人で敵10人を殺すまでは死なない。
6. 最後の一人となってもゲリラで敵を悩ませる。

圧倒的な戦力の差に徹底抗戦 だが、敗戦の日を迎える

ついに米軍上陸、 摺鉢山に星条旗翻る

1945(昭和20)年2月16日、ついにその時は訪れた。硫黄島沖へ押し寄せた米軍の800隻におよぶ大艦隊、航空機4,000機による猛攻撃が開始されたのである。硫黄島で迎え撃つ日本兵は21,000人。そこを6万人のアメリカ兵で叩こうというのだ。圧倒的な兵力による5日間の短期決着、それが米軍の目論見であった。

硫黄島に向けた凄まじい艦砲射撃は3日間続き、B29爆撃機による爆弾投下が



↑上陸前の砲撃を受け白煙を上げる硫黄島。日本兵たちは地下壕に身を潜め、3日ものあいだ激しい轟音と衝撃に耐えた
←突如日本軍の反撃が始まり、米軍の海兵隊員たちは砂浜で身動きが取れなくなった

それに加わった。数十万発の砲弾は海岸をえぐり、摺鉢山の頂上を吹き飛ばして、硫黄島の姿をすっかり変えてしまった。

4日目の朝、舟艇が次々と海岸に到達し、米軍の硫黄島上陸が始まる。だがたどり着いた海岸は不思議な静けさに包まれており、2時間後に9,000名の海兵隊が上陸完了する頃には兵士たちの間に拍子抜けしたような空気さえ漂っていたという。

しかし、彼らが前進しようとしたその時突如大音響が起り、銃弾と巨弾の雨が嵐のように吹き荒れた。不意を突かれた反撃に海兵隊員たちはたちまちパニックとなり、阿鼻叫喚の様相を呈しながら砂浜に倒れていった。アメリカはこの日1日だけで2,400名の死傷者を出している。

その後米軍は姿の見えない日本兵に怯えながらも前進を続け、21日には急務であった摺鉢山奪取に向けて山麓を包囲。摺鉢山に築かれた地下陣地は海と空からの砲撃に耐え、ここを守る1,700名の守備



米軍が摺鉢山の頂上に初めて星条旗を立てた瞬間。この後2度ほど、生き残った日本兵が日章旗を立て直すなどの小競り合いがあったとされる

隊は押し寄せるアメリカ兵に激しく応戦した。だが米軍は洞窟やトーチカを手榴弾や火炎放射器で焼きつくしながら進み、2日後の23日、その山頂に星条旗を立てることに成功する。

壮絶を極めた 米軍の焦土作戦

戦いはここからさらに激化していく。摺鉢山を落とした米軍は次に島の中央から北部に向けて前進するが、起伏の多い複雑な地形には日本軍の地下壕が網の目のように張り巡らされていた。どこに潜んでいるともわからない日本兵を警戒した米軍は、徹底した焦土戦術を取る。すなわち、あらゆる場所を焼き、小さな窪みや岩穴にも手榴弾を投げ込み、あるいはガソリンを流し込んで火をつけ、あたかも害虫駆除のごとく日本兵を処理していくのだ。2月26日の時点ですでに兵力が2分の1にまで減少していた日本軍は頑なに抵抗を続けていたが、食糧が尽き、飢えと渇きにも苦しむ兵士たちの状態はもはや極限に達しようとしていた。

栗林兵団の最期 そして、終戦へ

3月16日、部下とともに島の北端へ追い詰められていた栗林忠道は、大本営に訣別電報を打電。添えられた辞世の歌は「国の為重きつとめを果し得て 矢弾尽き果て散るぞ悲しき」というものであった。

これより10日後の3月26日、栗林は残された部下400名の先頭に立って最後の攻撃に立つ。それはかねてより栗林自身が禁じていた捨身のバンザイ突撃ではなく、最後まで敵を攪乱せんとする執念の奇襲だった。これによりアメリカ兵170名が死傷、日本兵はほぼ全滅し、硫黄島の組織的戦闘が終結する。

それから6日後の4月1日、米軍は沖縄本島に上陸。本島や周辺の島々で激しい地上戦が展開されるとともに、日本中が空襲の炎に包まれることとなった。8月6日、最初の原爆が広島に、8月9日、2発目の原爆が長崎へ投下された。そして8月14日、日本はポツダム宣言を受諾し、長きにわたる大戦がここに幕を閉じた。



米軍はこの戦いを「デタッチメント作戦」と名付けた。第1計画のマップでは、東海岸に上陸できない場合に備え、西海岸上陸の代替計画も立てられていたことがわかる

硫黄島戦における日米両軍の死傷者数

	日本軍	米軍
戦死者	20,129	6,821
戦傷者	1,020	21,865
合計	21,149	28,686

硫黄島での死闘は、第2次世界大戦で米軍にもっとも多くの死傷者を出したとされ、アメリカ本土に衝撃を与えた。日本軍のデータは厚生労働省、米軍のデータは海兵隊戦史による。最終的に投入された兵力は日本軍2万2,786名、米軍11万名。

書籍で探る硫黄島での戦い

硫黄島での激戦についての書籍は数多い。ここに挙げた栗林忠道、西竹一の人間に迫ったもの、米国側から硫黄島戦を書いたもののほか、『十七歳の硫黄島』(秋草鶴次・著/文藝春秋)、『戦争と人間の記録 硫黄島守備隊』(越村敏雄・著/現代史出版会)など、生き延びた日本兵による書籍もある。また『NHKスペシャル 硫黄島玉砕戦 ～生還者61年目の証言～』を書籍化した『硫黄島玉砕戦 生還者たちが語る真実』(NHK取材班・編/NHK出版)は、優れたドキュメンタリー(DVD盤もあり)。



『硫黄島の星条旗』
ジェームズ・ブラッドリー／
ロン・パワーズ・著
島田三蔵・訳 文春文庫
2002年

米従軍カメラマン、ジョー・ローゼンタールが撮影し、ピューリッツァー賞を受賞した写真に写る6人の兵士。その後の彼らの人生に迫る。



『玉砕総指揮官の絵手紙』
栗林忠道・著
吉田津由子・編
小学館 2002年
栗林忠道が米国留学先や戦地から息子、娘に宛てた手紙を収録。軍人だけでなく、人間、親としての側面がうかがえる。



『栗林忠道 硫黄島からの手紙』
栗林忠道・著 半藤一利・編
文藝春秋 2006年
栗林忠道が家族へ宛てた書翰全41通を完全収録。半藤一利による詳細な解説と注・年譜付き。



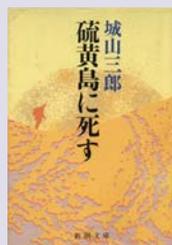
『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』
梯久美子・著 新潮社 2008年

陸軍小笠原兵団長、栗林忠道が家族に送り続けた手紙をもとに、玉砕を拒んで最期まで戦った彼の人間像を探る。書名は栗林が死にゆく将兵について「散るぞ悲しき」と詠んだ辞世の句から。同じ著者に栗林の最期を丁寧に追った『硫黄島栗林中将の最期』(文藝春秋 2010年)もある。



『今ここに神はいない 米海兵隊員が見た硫黄島の地獄』
リチャード・ユージン・オバートン・著
奥田宏・訳
梧桐書院 2010年

硫黄島戦に参加し、生き残った海軍兵による記録。自身の体験をつづさに語っている。



『硫黄島に死す』
城山三郎・著
新潮社 1984年
ロサンゼルス・オリンピック馬術大障碍の優勝者・西竹一について書いた表題作で文藝春秋読者賞を受賞。全7編収録。

硫黄島を舞台にした映画

激戦が繰り広げられた場所だけに、小説、映画、TVドラマ、ドキュメンタリー番組などで取り上げられることもある硫黄島。古くは1949(昭和24)年公開の映画、『硫黄島の砂』があり、これには硫黄島の星条旗を実際に立てた兵士も出演。アラ

ン・ドワン監督のアメリカ映画だ。国内作品としては、1959(昭和34)年に公開された宇野重吉監督による『硫黄島』がある。原作は芥川賞を受賞した、菊村到の同名小説だ。そして以下に紹介する2部作も硫黄島が舞台となっている。

『硫黄島からの手紙』

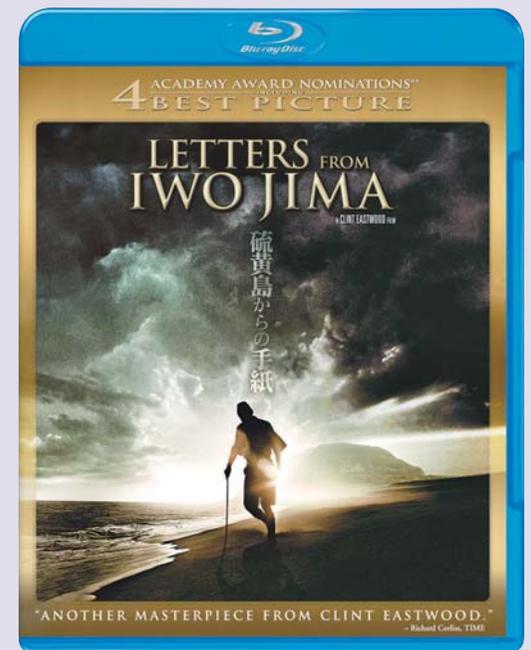
出演：渡辺謙、二宮和也、伊原剛志、加瀬亮、中村獅童
監督：クリント・イーストウッド

Story

2006(平成18)年、硫黄島の地中から発見された数百もの手紙。第2次世界大戦末期、米軍が迫る硫黄島から兵士たちが家族に宛てて書き残し、そして届かないまま、硫黄島の地に眠っていた手紙だ。物語は、どのようにして日本軍が圧倒的兵力の米軍に対抗したのかを描きつつも、登場人物たちがしたためる手紙を通して、彼らが抱える人生、思いなどを、浮かび上がらせる。

小笠原方面最高指揮官・栗林忠道陸軍中將を渡辺謙が、西郷陸軍一等兵を二宮和也が演じ、また、名優クリント・イーストウッドが監督したことでも知られる。作中に一部、島民の存在を表現したシーンが含まれる点は、ほかの硫黄島を描いた戦争映画と異なる点である。

ブルーレイ ¥2,381+税 / DVD ¥1,429+税
ワーナー・ブラザーズ・ホームエンターテイメント
©2007 Warner Bros. Entertainment Inc. and DreamWorks LLC. All rights reserved.



『父親たちの星条旗』

出演：ライアン・フィリップ、ジェシー・ブラッドフォード、
アダム・ビーチ、バリー・ペッパー、
ジョン・ベンジャミン・ヒッキー
監督：クリント・イーストウッド

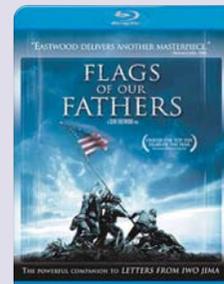
Story

摺鉢山の山頂に星条旗を打ち立てる瞬間を撮影された6人の兵士たち。その後、その写真が有名になり、アメリカ国内で戦意高揚のプロパガンダに利用され、人生が変わっていく米兵、3人の姿を描く。

太平洋戦争時の硫黄島の戦いを日米双方の視点から描いた硫黄島プロジェクト

作品。上記の『硫黄島からの手紙』は日本側から、そしてこちらの『父親たちの星条旗』はアメリカ側からの視点で激戦を描いている。原作はジェームズ・ブラッドリーとロン・パワーズによるノンフィクション本『硫黄島の星条旗』(原題:Flags of Our Fathers)。

ブルーレイ ¥2,381+税 / DVD ¥1,429+税
ワーナー・ブラザーズ・ホームエンターテイメント
© 2007 Warner Bros. Entertainment Inc. and Dream Works LLC. All rights reserved.
※価格は2016年3月31日現在



島民と戦争

戦況の悪化とともに 島民の暮らしも戦争色に染まる

軍事教練に勤労奉仕。 自宅は軍人たちの宿に

1933(昭和8)年に千島部落に海軍戦闘機のための仮設飛行場が設営された頃から、島民の生活にも戦争の影がいよいよ色濃くなっていった。その後も続く飛行場の拡大工事には硫黄島青年会が駆り出され、高等科の生徒も勤労奉仕として建設現場で働いた。学校の授業は軍事教練が中心になり、家庭科実習室と青年学校の兵器倉庫が兼用された。1937(昭和12)年には、海軍省が島内に「模写・写真撮影等の禁止」の立札標識板を出したが、これは飛行場の建設など、軍事上の機密が外部に漏れないための措置。1939(昭和14)年には愛国婦人会が創設され、出征軍人家族援護の活動を開始した。さらに1942(昭和17)年、和智恒蔵海軍中佐が1,000名以上の警備隊を率いて上陸すると、宿泊

設備の不足を補うため、島民の家々に隊員を分宿させ始めた。翌年には零戦機を献納するための献金活動を行い、爆撃に備えての避難訓練も活発になっていく。

空襲に艦砲射撃。 7月、強制疎開となる

1944(昭和19)年の5月には米軍機が硫黄島攻撃を行い、日ごとに激しさを増していった。6月15日、爆撃機からの硫黄島に対して初めての空襲。翌日も約100機の爆撃機から攻撃され、全島規模で大きな被害が出たため、島民に対して軍当局から疎開命令が出された。

疎開時に携行できるものは手に持てるもの2個に限る(1,3個という説もある)、とされた島民は、平和に暮らした自宅はもちろん、様々なものを置き去りにして島を離れるしかなかった。

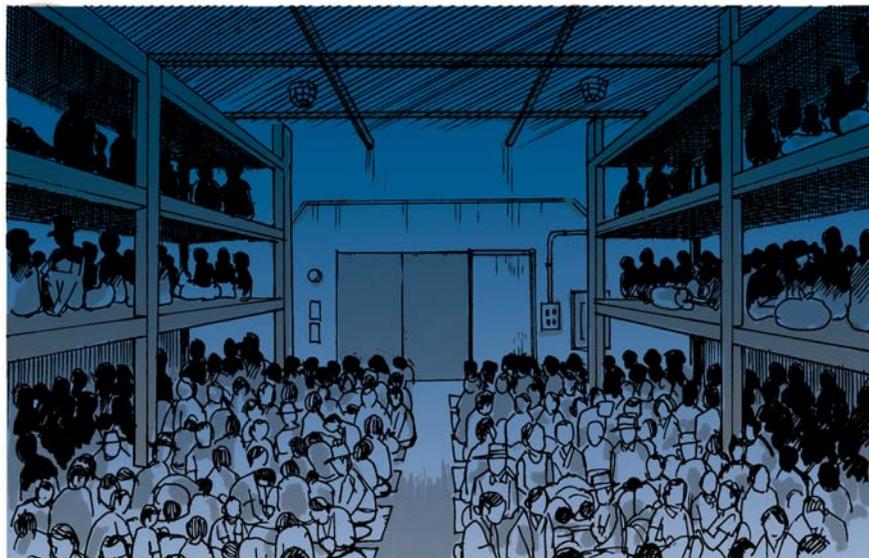
硫黄列島からの強制疎開船の運航状況

月日	船名	到着地と日付	硫黄島	北硫黄島
6月14日	九州丸、弥栄丸、辰栄丸、第十雲海丸	横浜(6/18) 東京(6/18) 横須賀(6/18) 横須賀(6/18)	230	23
7月10日	芝園丸	東京(7/14)	195	
7月16日	利根川丸	横須賀(7/19)	573	
7月23日	九州丸	館山(7/26) 横須賀(7/27)		67

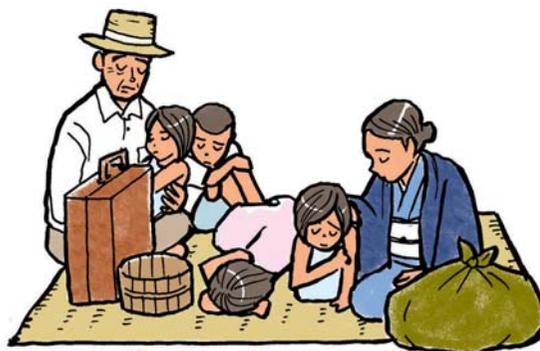
※上記のほか、硫黄島からは4月4日に芝園丸で2名が、7月1日には能登丸で4名が疎開している。表内左は父島出港の月日

不安だらけの疎開

島民のほとんどは「日本が戦争に負ける」とは思っておらず、すぐに島へ帰ってこられると思っていた。見知らぬ疎開先への不安を抱えたまま、疎開船に乗り込んだ。



貸物用の棚に人が。船倉のため薄暗い。



家族と身を寄せ合って不安をしのいだ。



島から持ち出せたのは風呂敷包み1つ

硫黄島島民が受け取った “硫黄島からの手紙”

クリント・イーストウッド監督映画『硫黄島からの手紙』（2006年）。映画の冒頭では戦後61年を経た2006（平成18）年、硫黄島の地中から数百もの手紙が発見される場面が描かれる。発見された手紙は、硫黄島で戦った多くの兵士たちがそれぞれの故郷、疎開先で彼らの帰りを待ちわびる家族へ宛てて書き残したものの。

けれど、その手紙は愛する家族のもとに届くことなく、硫黄島の地面の下で61年間、ひっそりと沈黙していたのだ。

ただし、硫黄島の戦況が激化する前、輸送機が日本本土との間を繋いでいられた間は、硫黄島に赴任した兵士たちからの手紙は配達されていた。映画の中にも硫黄島の防衛戦を指揮した栗林忠道が書き送った手紙が登場する。これは、戦後になってからまとめられた『「玉砕総指揮官」の絵手紙』（栗林忠道・著 吉田津由子・編）をもとにした描写だ。

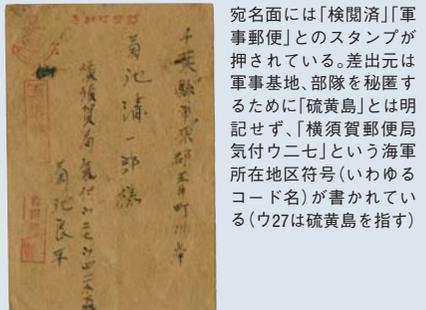
そして軍属として硫黄島に残った島民も、疎開先の家族に宛てて手紙を書いていた。自分は戦地、硫黄島に残って軍属としての務めを果たしながら、疎開した家族の身を案じる文面は、戦後70年を経た現在でも、家族・親類・縁者たちの涙を誘っている。

One Point解説

戦時中の検閲とは

戦時中は臨時郵便取締法が制定され、軍事作戦に関係する情報や反軍反戦・天皇批判などの思想的記述などが含まれていないか、手紙・電報類は細かく検閲されていた。

問題ありと判断された場合、該当部分を黒く塗りつぶしたり、没収・押収したりされるため、自由に手紙を書くことすらままならなかった。

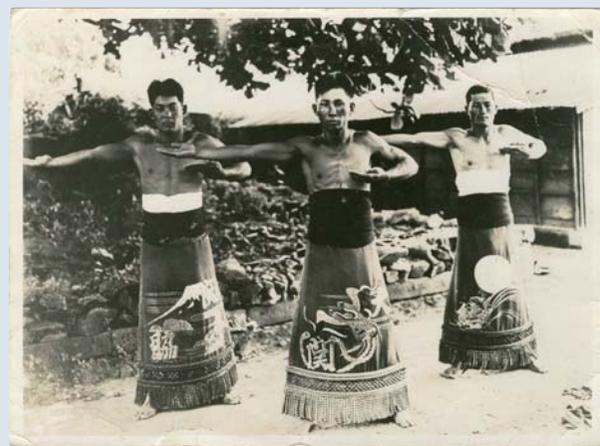
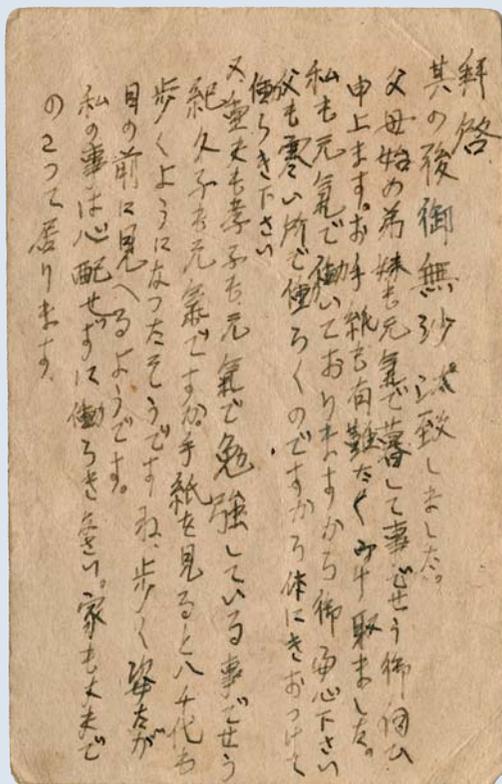
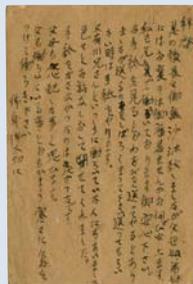


宛名面には「検閲済」[軍事郵便]とのスタンプが押されている。差出元は軍事基地、部隊を秘匿するために「硫黄島」とは明記せず、「横須賀郵便局 気付ウ二七」という海軍所在地符号（いわゆるコード名）が書かれている（ウ27は硫黄島を指す）

拝啓
其の後御無沙汰致しました。
父母始め弟妹も元気で暮して事でせう御伺い申上げます。お手紙も有難くウケ取ました。私も元気で働いておりますから御安心ください。父も寒い所で働らくのですから体にきをつけて働らぎ下さい。
又、重夫も孝子も元気で勉強している事でせう。紀久子も元気ですか。お手紙を見ると八千代わ歩くようになったそうですね。歩く姿が目に見えます。
私の事は心配せずに働らきなさい。家も丈夫でござって居ります。



子供時代の菊池良平さん。潤さんのハガキによると、良平さんは炊事を担当。「身長が伸びて一回見せたいほど」だったという



左の人物が菊池潤さん。親戚である菊池良平さんとともに硫黄島に残った。写真にあるように健康で立派な体の持ち主だったが、硫黄島に残った後、病気をして40日余り病床に伏せたとある



島民の 声

を聞く
Voice 7

1916年生まれ

赤間道江さんの証言



赤間道江さん／硫黄島で赤間新二さんと結婚し、男4人、女1人を出産。1944(昭和19)年5月25日に男子を出産直後の6月に強制疎開の船に乗ることに。2012(平成24)年逝去。

今も思い出す 花に飾られた道

赤間道江さんが結婚したのは1935(昭和10)年。19歳の時のこと。相手は7人兄弟の二男、新二さん。硫黄島に5万平米もの土地を所有する初期開拓者の息子だった。結婚の翌年、長男が誕生したが、1歳にならないうちに亡くなり、1937(昭和12)年に生まれたのが長女、順子さんだ。「(夫は)短気な人だったが、娘を溺愛



赤間道江さんと長女の三浦順子さん。返還後、墓参事業に何度も参加している

して、他の人には決して抱っこもさせなかったんです」と赤間さん。

その当時、硫黄島での出産は「とりあげばあさん」と呼ばれる、出産に慣れた人を産婆として行われたが、順子さんの出産時には間に合わず、赤間さんが一人で産み落としたのだという。「油紙や要らない布を敷いて一人だね。父はその時、産婆さん呼びに行ってたから」と順子さん。後産は新二さんが庭に穴を掘って処理した。

その新二さんは硫黄島で建具屋を営んでいた。切り出した木で島の必需品、荷車をつくったほか、「木の枕も作っていましたよ。とても硬い枕」というように、様々な物を頼まれては作り、島民に重宝がられていたという。順子さんは言う。

「子供の頃、家から海まで、父と一緒に牛を洗いに行きました。赤土の坂をのんびりと。サルスベリのピンクと白の花が咲いて、本当に美しい島でした」。

攻撃を避けながらの疎開船 残された島民にも悲劇が

疎開後の厳しい生活 内地で苦難が待っていた

硫黄島から漁船や木造船に分乗した島民は、まず父島へ。二見港近くの隧道で数日過ごした後、芝園丸、利根川丸などの貨物船に乗り換えて内地を目指したが、米軍からの攻撃を避けて、日没を待ってから出港。迂回をしながらの航行だった。

内地へ到着した島民たちはその後、散りぢりになる。着いた内地でも米軍の攻撃はあり、1945(昭和20)年には東京大空襲があった。行くあてがない者は寺に身を寄せ、親戚や知人のつてをたどって地方へとさらに疎開する者もいた。生活をしていこうにも、生業・生計の基盤を疎開先ですぐに得ることは難しく、少ない配給を受け取るにも苦勞。終戦後、食料不足や住宅事情の悪化、インフレによって、多くの島民の生活状況はさらなる困窮状態

強制疎開の証明書

「軍の命令により引き揚げたることを証明す」と村長名で記されている。一部の島民に対し、疎開先での身元証明のために発行されたものと思われる。



に。自殺や心中に追い込まれた島民も少なくなかった。

軍属となった島民 家族は引き裂かれた

そして疎開をせず、硫黄島に残った者もいた。軍司令部から強制疎開命令が出た際に、原則として16歳以上の健康な成年男子は島に残り、軍に協力するよう求められた。疎開先で生活に困らないようにと、原則として各家庭で成人男性1名は働き手として疎開することができたが、それ以外の男性は日ごと空爆が激しさを増す硫黄島に残ることになった。

それまで普通に生活をしていて、正式な戦闘訓練を受けていない島民の多くは、海軍204設営隊や陸軍硫黄島臨時野戦貨物廠もつしよに配され、部隊の炊事を担当させられたり、島内の地理に詳しい島民は軍関係者の道案内や伝令役をしたりと、軍属としての任務にあたった。

7月の強制疎開時、島に残留した島民は160名。そのうち、57名は地上戦が開始されるまでに父島へ移送されているが、以後も島に残された103名は、翌年の地上戦に動員されることになる。そして現在、平和祈念墓地公園内に建つ硫黄島旧島民戦没者の碑には、82名の島民の死者名が刻まれている。

島民の 声

を聞く
Voice 8

1924年生まれ

須藤章さんの証言

父母ら家族と離れ 島に残留して見たもの

「風が軽いんですね、硫黄島は。だから暑い島でも生活はしやすかったですよ」。

そう語るのは須藤章さん。1944(昭和19)年の強制疎開時に船に乗らず、硫黄島に残った160名のうちの一人だ。当時、須藤さんは20歳で徴兵制の対象になっていたが、米軍との戦況が悪化していくなか、徴兵官が島外から硫黄島へやってくることができず、徴兵されないまま、硫黄島で病気になる、床に臥せていた。父母ら5人の家族は疎開船で内地へ向かったが、須藤さんはそのまま残留し、病気が治った後に軍務に動員された。

1945(昭和20)年2月、いよいよ始まった米軍による硫黄島への攻撃を、須藤さんはこう振り返る。

「彼らは上陸するために海と空から砲弾、艦砲射撃、撃ちました。夜昼ぶっ通し。これものすごいですよ。あのね、今日ね、今晚出ると、1本立っています、木が。それが、次の晩出ると、(その木が)倒されてない。形がない」。

昼も夜も続く砲弾の雨あられ、そして艦砲射撃。艦砲射撃とは、軍艦が搭載する大砲、すなわち艦砲で射撃することであ



須藤章さん／父が初期入植者。西部に住み、おじが漁師の組合長を務めていたこともあり、小学5～6年の頃から漁を手伝っていた。学校帰りには野球やテニスも楽しんだという。

り、硫黄島はその時点で米軍の新鋭戦艦3隻、旧式戦艦3隻、巡洋艦5隻に取り囲まれていた。

「海の水が見えないくらい、硫黄島を何回も何回も囲んじゃった」と、須藤さんはその様子を述懐している。

そして米軍による本格的な硫黄島上陸作戦が始まる。2月19日午前8時過ぎ、戦闘機計72機が空母から飛び立ち、それと入れ替わりで海兵隊の飛行中隊48機が飛び立つ。その後、再びの艦砲射撃。午前9時過ぎに、米軍は上陸用舟艇や水陸両用車を使い、南海岸から上陸してきた。

「戦車の先に、ブルドーザーの歯をつけて。そして道路をつくりながら進んでくるわけです。彼らは日本が爆雷を埋めていると思って追ってくるわけです、兵隊

が鉄砲を担いで、戦車の後ろをノコノコと。これがアメリカの戦争なんですね。日本では、とてもそんなことできない」。

当初から物量、戦力の面で日本とアメリカには大きな差があった。しかもこの時点で硫黄島守備隊は物資の補給もままならず、援軍の望みも薄かった。

親戚、弟が命を落とした 「語ることはつらい」

米軍が上陸するまでに、須藤さんは硫黄島でおじを亡くしている。おじは1944(昭和19)年11月頃に、爆弾の破片を受けて落命。須藤さんは弟と一緒に、このおじを葬った。いとはこは1945(昭和20)年3月9日、迫撃砲の弾が落ち、その破片が肋骨に入って亡くなった。このいともやはり、須藤さんが自らの手で洞窟に入れて、葬ってあげたという。

そして当時17歳だった弟、雄三さんもまた、硫黄島の戦いに巻き込まれて命を落とした。夜になり、隠れていた洞窟から涼むために外へ出た須藤さんのもとへ、別の場所にいた弟がやってきた。須藤さんはその時のことをこう言う。

「あんちゃん、(軍人が)“切り込みに行ったら帰って来な”、(と自分に)言うんだけど、俺たちには手榴弾しゅうりゅうだんのひとつもない」。

正式な軍事訓練も受けたことのない17歳の雄三さんが、手榴弾のひとつもない状態で、どうやって敵と戦えばいいというのか。

「何で悲しいかなというね。弟が、“あ

んちゃん、帰ってこないで”(と私に言う)。私には切り込みに行ったら、“帰ってこないで”と言って。私に、“何も無いんだよね、俺たちには”、それだけを話して。それで私は弟に何ひとつ、ふたりでがんばろうねって言うことも言えない。がんばってねとも言えない。気をつけても言えない。一言もなにも言えないんだよ。弟は姿を消した。それが痛いです。つらいです。それを思い出しちゃうんです」。

戦う術を何も持たないまま、雄三さんがその後、どうなったのか。以後、須藤さんが弟の姿を見ることはなかった。

須藤さん自身は洞窟に潜んで激戦を生き延び、1945(昭和20)年4月に米軍の捕虜となる。7月にグアムへ移送され、ハワイのホノルルを経て、終戦の日を迎えることになる。1946(昭和21)年4月になってようやく横須賀へ帰還するが、両親の居場所もわからず、その後も苦勞の連続だった。また、帰国直後は「捕虜」に対しての風当たりも厳しく、須藤さんは長らく、自身の経験を話さずにいた。「胸が苦しくなる。つらい。今日も悲しいです」。そう言って、須藤さんは弟の写真を仰ぎ見た。



「30貫の豚から脂を搾って、2貫(7.5kg)くらいのラードがとれる。それを島では使っていました」と教えてくれた

終戦・返還

米軍基地時代を経て 23年ぶりに施政権が返還される

硫黄島、再び日本に。 島民のいない返還式

終戦後、硫黄島は他の小笠原の島々とともに「ボニン・アイランズ」の呼び名でアメリカ施政権の下に置かれ、1968(昭和43)年に日本へ返還されるまでアメリカ空軍や沿岸警備隊の基地として利用されていた。のちに公開されたアメリカ政府の機密文書によって、父島と硫黄島には1950年代を中心に対ソ連・中国戦を想定した核弾頭が配備されていたことが明らかになっている。また島の返還後も有事の際は核の再配備を認めるという密約が交わされたことも明るみになり、これらのニュースは日本人に大きな衝撃を与えた。

1960年代に日本で反米運動が活発になると、危機感を感じたアメリカは日本の世論をなだめるように小笠原諸島の返還を決定。1968(昭和43)年4月に日米間で小笠原復帰協定が締結され、同年6月26日、硫黄列島を含む小笠原諸島の島々の施政権は、23年ぶりに日本に返還された。

硫黄島では、島の中央に建つ米空軍司令部前で返還式が行われ、ここに23年間

翻っていた星条旗に代わり、日の丸が掲揚された。また、戦時中のあの激しい戦いのさなかアメリカ兵たちが星条旗を打ち立てた摺鉢山の山頂にも高らかに日の丸が掲げられた。しかし式典に参加してこれらを見上げることができたのは、米軍、自衛隊、報道陣のみであった。



摺鉢山山頂にある米軍戦勝記念碑。碑の後ろにはかつてアメリカ兵が星条旗を立てたポイントが残されており、返還式ではこの場所に日の丸の旗が掲揚された



摺鉢山から北部を見晴らす。右手に広がるのはかつてアメリカ兵が次々と上陸した黒砂のニッ根浜。戦前まであった集落地は、長い年月の間に木々が飲み込んでいた

日米両軍の兵士 再び硫黄島へ上陸す

返還後の硫黄島には、海上自衛隊の航空基地が置かれた。島内全域が自衛隊の管轄下にあるため原則として基地勤務の自衛隊員以外は立ち入りが禁じられ、島民の帰島の夢がかなわぬまま現在に至っている。島内には、大戦中に使われた大砲や戦車の残骸、地下壕、トーチカ、飛行場などの跡が残存。また岩肌におびただしい数の銃痕や爆撃の跡が見られるなど、かつての戦闘の激しさ、兵たちの苦しみや無念を生々しく今に伝えている。

1985(昭和60)年2月19日。硫黄島のニッ根浜に9,000人の米軍海兵が上陸した日からちょうど40年を数えたこの日、まさに同じ場所で、当時敵対した日米双方の兵士ら約400名が「名誉の再会」を果たした。当日海岸に建立された記念碑には海側に英文、山側に和文で言葉が刻まれており、それぞれの面に日米元兵士が整列する様子は、あたかも40年前を再現するかのようであったという。同じ痛みを分かち合った兵士たちは、互いに歩み寄り、抱き合って涙を流した。

硫黄島協会

米軍の硫黄島侵攻が始まる3か月前、栗林忠道中将と口論して内地に戻された和智恒蔵という軍人がいた。終戦後は僧となって、硫黄島戦没者の慰霊と遺骨収集に尽力。彼が設立した硫黄島協会は、追悼事業の実施や慰霊碑・記念碑の建立、遺骨収容事業などに関わっている。

記念碑 再会の祈り 碑文



「硫黄島戦闘四十周年に当り、會つての日米軍人は本日茲に、平和と友好の裡に同じ砂浜の上に再会す。

我々同志は死生を越えて、勇気と名誉とを以て戦った事を我々は銘記すると共に、我々の硫黄島での犠牲を常に心に留め、且つ決して之れを繰り返す事のないように祈る次第である。 昭和60年2月19日」



ne Point解説



硫黄島航空基地と 救急患者搬送

小笠原諸島から本土への救急患者搬送には硫黄島航空基地の海上自衛隊が協力。父島・母島は飛行場を持たないため、場合によってはヘリコプターで一旦硫黄島の航空基地へ搬送し、自衛隊機に乗り換えて本土に向かうなどの対応を取っている。近年、父島・母島に急急搬送用夜間離着陸設備が整い、夜間でも硫黄島経由の搬送がスムーズに行われるようになった。



硫黄島の現状

アメリカからの返還後 島内に残る激戦の傷跡

島民の帰島はかなわず 戦前の暮らしは消えた

1968(昭和43)年6月、硫黄列島を含む小笠原諸島の施政権が日本に返還され、1944(昭和19)年から強制疎開を余儀なくされていた父島・母島の島民に帰還・再居住が認められた。しかし、硫黄島から米空軍が撤退したのちも、日本政府は硫黄島および北硫黄島島民の帰還を許可しなかった。硫黄列島の島民は1969(昭和44)年1月、硫黄島帰島促進協議会を結成。以来、政府および東京都に対し、帰島と再居住を求める陳情を行っているが、いまだ硫黄島島民の帰島・再居住は実現していない。

現在の硫黄島には海上自衛隊硫黄島航空基地隊が置かれ、島民は遺骨収容、年3回の墓参事業のほかに、故郷の土を踏む機会はない。

慰霊の碑が建つ 硫黄島のいま

いまの硫黄島に戦前の暮らしの痕跡はほとんど残っていない。米軍が駐留して

いた頃に持ち込まれたといわれるギンネムが繁殖し、植生も変わった。そして島内のあちこちに戦争の痕跡が残り、ここで命を落とした戦没者、島民を慰霊するための供養塔、碑、公園などが整備されている。

鎮魂の丘



1983(昭和58)年、日米すべての戦没者の慰霊のために、東京都により碑が設置され、周囲の台地が鎮魂の丘と名づけられた。建築家・相田武文氏が設計し、井上靖氏が碑銘を選定

硫黄島民 平和祈念墓地公園



戦前の島民墓地の敷地跡に1990(平成2)年、小笠原村によって設置。戦争で命を落とした島民の霊を慰めるとともに、旧島民の先祖を祀っている

204設営隊



軍属として残された旧島民の多くが所属し、70名が軍と運命を共にした海軍204設営隊の跡地。現在でも炊事用の釜場や天水槽などが残っている

硫黄島戦没者の碑



1971(昭和46)年、厚生省(当時)によって日本軍戦没将兵のための慰霊碑として建立。日本軍最後の組織的戦闘が行われた天山壕の上であり、天山慰霊碑とも呼ばれる

摺鉢山



↑ 戦中に受けた米軍の艦砲射撃によって形が変わったといわれる。写真は米軍が上陸した二ツ根海岸から望む摺鉢山
▲ 摺鉢山山頂の日本軍戦没者顕彰碑(上)、特攻隊慰霊碑(下)

兵団司令部壕



陸軍小笠原兵団長、栗林忠道中将がいたことから栗林壕とも呼ばれる。入り口からすぐにあるコンクリート製の執務室で指揮を執っていたといわれる

北観音



戦死者慰霊のため、和智恒蔵によって1952(昭和27)年に設置された観音像。米軍占領時代に心ない兵士により破壊され、代わりの石像が設置されたが、日本返還後に元の観音像が見つかり、修復・安置された。南地区に南観音もある

硫黄島神社



島民に親しまれた硫黄島神社。現在、自衛隊員によって復元された鳥居と社がある

硫黄が丘



現在、島内で最も硫黄が露出している地域。戦中は海軍が噴出する蒸気を利用して、食事の煮炊きに使用していた

壁画



アメリカの従軍カメラマン、ジョー・ローゼンタールが撮影した『摺鉢山に星条旗を掲げる6人の兵士像』という写真を、土丹岩に彫ってある

戦争の痕跡



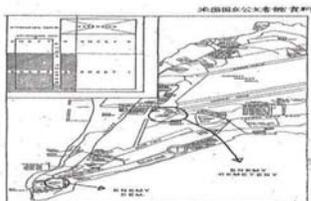
地下壕、トーチカ、砲台など、生々しい戦争の遺物が島の各地に点在

今も続けられている 遺骨帰還への取り組み

地下壕での戦いが 収容を困難にさせている

硫黄島における戦死者の数は、厚生労働省によると約21,900名。遺骨の調査および収容は1952(昭和27)年から始まり、2016(平成28)年1月末日までに発見・収容された遺骨の数は10,378柱となっているが、いまだに11,520柱の遺骨が硫黄島に眠ったままである。

硫黄島での戦いの特徴のひとつが地下壕に潜んでのゲリラ戦であったが、このため、地下壕の奥部に追込まれて命果てた者も多いと推測される。地下壕の合計距離は約18kmもあり、あえて複雑に入り組んだ構造を取っていた。壕の入り口も数千か所あったといわれ、米軍の手によって閉鎖・破壊された地下壕も多く、地下壕内部の遺骨の状況は不明な点が多い。このことが硫黄島の遺骨収容を長らく困難にしてきた。



米国立公文書館で見つかった
集団埋葬地と思われる場所の地図

戦没者遺族とともに 島民も遺骨収容へ

硫黄島からの遺骨帰還は、厚生労働省社会・援護局によって実施され、戦没者遺族や関係者、硫黄島島民なども参加してきた。2000(平成12)年度からは「小笠原村在住硫黄島旧島民の会」および「小笠原村」も派遣団員となり、「硫黄島協会」「日本遺族会」などととも遺骨収容作業に従事している。

なお、収容された遺骨は硫黄島から本土へ空路で向かい、千鳥ヶ淵戦没者墓苑で行われる遺骨引渡式で、厚生労働省に引き渡されている。

米国資料調査による 集団埋葬地の発見

2010(平成22)年8月、菅直人内閣総理大臣(当時)の指示により、硫黄島の遺骨帰還などに政府一体となって取り組むための特命チームが設置された。特命チームは、硫黄島に関する米国部隊の行動記録など、約40万ページ分の情報が保存されている米国国立公文書館において、米国防総省の協力を得て資料調査を実施。

その結果、硫黄島飛行場の滑走路の西側と摺鉢山山麓の2か所に集団埋葬地が

つくりだされたと考えられる有力情報が発見された。これらの集団埋葬地に埋葬されていると思われる遺骨の柱数は、それぞれ約2,000柱と約200柱と考えられた。

この米国資料調査により得られた情報に基づいて遺骨帰還を実施したところ、資料に示された地点から多数の遺骨が発見された。その結果、2010(平成22)年度は822柱と返還直後以来となる、多くの遺骨の収容を達成した。今後も1柱でも多くの遺骨の収容・帰還が期待されている。



遺骨収容の様子



自衛隊隊員も参加・協力



遺骨収容を行う菅直人総理(当時)

※2016(平成28)年1月末日現在
※派遣回数には、遺骨送還を伴わない収容・調査の回数が含まれる。
※本表の他、渡島者等により208柱が送還されている。
(送還合計 10,378柱)
厚生労働省の以下発表をもとに加工。
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hokabunya/senbotsusha/seido017/senbotsusha_shuuyou/index.html
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12100000-Shakaiengokyoku-Engo/0000106603.pdf>
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002f14r-att/2r9852000002f16h.pdf>

硫黄島における慰霊事業実施状況

年度	戦没者遺骨帰還		
	派遣回数	収容数	収容数累計
昭和27	1	91	91
昭和43	3	270	361
昭和44	2	2,837	3,198
昭和45	2	852	4,050
昭和48	1	125	4,175
昭和49	1	247	4,422
昭和51	1	33	4,455
昭和52	1	66	4,521
昭和53	2	214	4,735
昭和54	1	102	4,837
昭和55	1	162	4,999
昭和56	1	96	5,095
昭和57	1	112	5,207
昭和58	2	236	5,443
昭和59	2	182	5,625
昭和60	2	355	5,980
昭和61	2	378	6,358
昭和62	2	345	6,703
昭和63	1	214	6,917
平成元	1	204	7,121
平成2	1	146	7,267
平成3	2	342	7,609
平成4	1	54	7,663
平成5	1	65	7,728
平成6	1	39	7,767
平成7	1	16	7,783
平成8	1	26	7,809
平成9	1	11	7,820
平成10	2	49	7,869
平成11	3	1	7,870
平成12	2	164	8,034
平成13	2	84	8,118
平成14	1	57	8,175
平成15	4	34	8,209
平成16	4	50	8,259
平成17	4	44	8,303
平成18	3	84	8,387
平成19	4	43	8,430
平成20	4	26	8,456
平成21	4	51	8,507
平成22	6	822	9,329
平成23	2	344	9,673
平成24	4	266	9,939
平成25	3	166	10,105
平成26	13	42	10,147
平成27	3	23	1,0170
合計	107		10,170

島民の声を聞く Voice 9

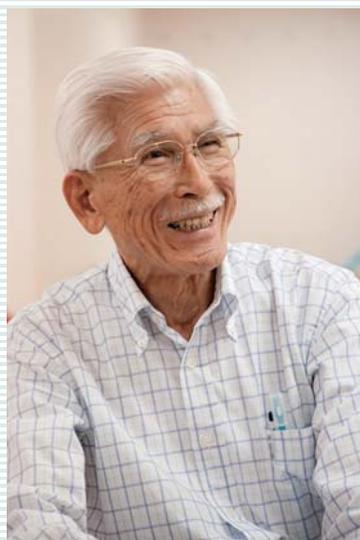
1930年生まれ

仁科昌三さんの証言

硫黄島の地形、景色は一変していた

「分からなかったですね、自分の家があったところは飛行場になっていましたから。何の痕跡も、面影もありませんでした」。

強制疎開以来初めて故郷、硫黄島を訪れた時のことを、仁科昌三さんはそう振り返る。それは1930(昭和5)年生まれの仁科さんが「47歳か、48歳の時」というか



仁科昌三さん／硫黄島生まれ。自宅は元山部落にあった島で唯一の旅館、太平館。子供時代は木登りをしたり、家で飼っていた軍鶏で闘鶏をしたりして遊んでいた。

ら、1977(昭和52)～1978(昭和53)年頃のこと。都の墓参事業で自衛隊機に乗り、日帰りで硫黄島へ向かった時の話だ。

「現地で場所が分かるのは摺鉢山と船見岩。船見岩の表面というか、蒸気でポコポコになっているところ、これだけです」。

戦前、船見岩があった硫黄が丘には現在、かつて定期船の到着を知らせた半鐘はなく、ところどころで上がる噴気と硫黄の臭いは往時と変わらない。

「ただね、“艦砲射撃や爆撃で硫黄島の地形が変わった”なんてよく言われますが、それよりも朝鮮戦争です」と仁科さんは言う。1950(昭和25)年から始まり、1953(昭和28)年に停戦になった朝鮮戦争で、アメリカは国連派遣軍として参加。朝鮮半島へ出兵する足掛かりとして、占領中の硫黄島を利用したのだ。米軍は滑走路を改変増強し、駐屯部隊の基地設営のため、高所を削り、低地を埋め立ててしまった。「戦前は、私の住んでいたところと元山飛行場とは、相当の高低差、斜面がありましたが、今は平らになっている。米軍がブルドーザーで全部平らにしてしまった」。

この変化が生家訪問や遺骨収容を困難に

いま、拡張された飛行場の位置にあった元山部落をはじめ、他部落もこうした地形の変化によって、戦前の暮らしの痕跡を見つけるのが困難になっている。それでも、島民は年2回の東京都、年1回の小笠原村の墓参事業に参加して、かつての生活の破片を探す。仁科さんも都と村

の墓参事業、そして遺骨収容にも積極的に参加してきた。

「(遺骨収容には)平成17(2005)年から行っているのかな。ずいぶん行っている」。

遺骨収容の場合、1回の派遣で約9日間の日程となり、その間、現地の平和祈念会館で寝泊まりすることになる。小笠原村の墓参事業でも、島内に泊まれるのは1泊なので、遺骨収容の場合、よりゆっくりと島に滞在することができる。もちろん、目的ははまだ1万以上も眠ったままの遺骨の帰還だ。

収容作業は簡単ではない。コンクリート製のトーチカや、入り組んだ壕の内部などを掘り進む際は、場所や時期によって内部の気温が45～46℃になり、10分も続けていられなくなる。したがって何人もが交代しながら掘り進めていく。有害ガスや不発弾が出てくる可能性もあるため、最初に陸上自衛隊のガス探知班、不発弾処理班が調べ、安全確認や不発弾処理をしてからでないと、作業を進められない。

それでも仁科さんは何十回も遺骨収容に参加してきた。それは、「自分が生まれた場所のために、国のために一生懸命戦ってくれた人たちが、まだ硫黄島に眠っているからです」という。

生家の旅館に栗林中将が滞在

海軍・陸軍の部隊が次々に硫黄島へやってくるなか、兵舎不足により民家への分泊が始まったが、島で唯一の旅館、太平館には栗林忠道中將ら、幹部が宿泊した。

「昭和19(1944)年6月8日に栗林中將が硫黄島に着任してこられた時、我が家の離れを宿舎にしておられました。着任された6月8日から6月30日までの間でですね。副官の藤田中尉も一緒でした。家で食事もなさっていました」。

仁科さんの手元には、軍に食事代を請求するためにつくった名簿の控えがある。なかでも6月28日のページには、栗林中將、藤田正善中尉のほか、摺鉢山の戦いで知られる陸軍の厚地兼彦大佐、堀江芳孝少佐、和智恒蔵中佐などの名前が並ぶ。

「元山飛行場に援軍の飛行機が内地から来ていましたが、栗林中將が飛行機の着陸するところを見たいとおっしゃるので、風呂に入られて浴衣姿の栗林中將を、高台へ案内したこともありました」。

そんな自分が会ったことのある人たち、故郷のために命をかけて戦った人たちのために、遺骨収容に参加してきた仁科さん。「硫黄島は慰霊の島です」と語った。



宿泊者名が記されたノートを広げ、名前と日付を指で追う。なお、7月以降、栗林中將らは司令部へ移った



写真類を焼失した島民も多いなか、仁科さんの場合は内地にいた親戚が大切に保存してきてくれたという

旧島民の貴重な里帰り。 硫黄島墓参事業とは

旧島民が硫黄島へ 帰れる貴重な機会

「せめて先祖・家族の墓参りがしたい」。そんな硫黄島旧島民の願いをかなえられるのが、現在、小笠原村が実施している硫黄島墓参事業だ。

第1回の硫黄島墓参は小笠原返還前の1965(昭和40)年5月18日、東京都が小笠原協会と連携して実施。当初は旅客機で硫黄島へ渡り、遺族代表10名、僧侶、医師、政府・報道関係者10名という限られた人数での墓参だった。以降、原則として年1回のペースで実施されてきたが現在では、東京都実施の墓参は年2回、春と秋に開催されている。

小笠原村による 硫黄島墓参事業

1997(平成9)年度からは東京都の墓参に加えて、小笠原村の事業として毎年6月の年1回、船による墓参が実施されている。小笠原海運の定期船おがさわら丸を父島からチャーターし、硫黄島旧島民のほか、戦没者遺族、村の中学2年生、小笠原の一般村民も参加する。

現地ではまず全員参加で慰霊祭が行われ、その後、出身部落へ里帰りしたり、島

内の見学をしたりとグループ別に行動する。その後、旧島民は島内の宿泊施設「平和祈念会館」で1泊することができる。以前の硫黄島には宿泊できる施設がなく、参加者は夕方一度、おがさわら丸へ戻って船内に泊まり、翌朝にまた硫黄島に上陸する必要があった。

しかし、旧島民の高齢化が進むなか、体力的な負担を軽減し、また、故郷の島で少しでも長い時間を過ごしてほしいとの配慮により、2002(平成14)年、小笠原村によって平和祈念会館が整備された。これにより宿泊できる人数に制限はあるものの、故郷の島でゆっくりと一夜を過ごすことができるようになった。

硫黄島墓参事業を実施するため、慰霊祭や壕内見学の準備、島内での交通手段の確保、参加者への案内などで、自衛隊および鹿島建設の全面的な支援を受けている。



船が接岸できる場所がないため、おがさわら丸から小型ボートで上陸する

日程一例

1日目

21:00、父島を出港

船中泊

2日目

朝、硫黄島へ到着
小型ボートに乗り換えて上陸
硫黄島旧島民平和祈念墓地公園
にて慰霊祭
昼食後、グループ別に出身部落へ
里帰りや島内視察

平和祈念会館に宿泊
(またはおがさわら丸にて船中泊)

3日目

午前中、島内視察
昼食後、グループ別行動で
島内視察など
夕方、おがさわら丸へ乗船、撤収
船上から献花しながら硫黄島発

船中泊

4日目

6:00、父島に到着



軍属として残された旧島民のうち、約70名が所属したと言われる204設営隊の釜場跡。島民は直接的な軍務よりも炊事などを担当することが多かった。大きな釜が今も残る



島内見学では兵団司令部壕、大阪山、摺鉢山などを訪れる。壕内に入れるところもあるが、地面の隆起による安全性を考慮して、見学場所は実施年度により異なる



↑硫黄島旧島民平和祈念墓地公園での慰霊祭。戦没者への祈りを捧げ、また今後の平和を誓う
←同公園内にある硫黄島先祖供養塔と硫黄島旧島民戦没者の碑。旧島民の有志によって建立された

One Point解説

航空機による墓参

現在、東京都の墓参事業は航空機を利用して春と秋の年2回、実施されている。高齢化の進む旧島民にとって、船での長時間移動は体力的に厳しいとの声もあるなか、埼玉県・入間から片道3時間足らずの飛行時間で硫黄島へ行ける東京都の墓参事業は、本土に住んでいる旧島民にとって貴重な里帰りの機会である。

以前は日帰りでの実施で、島内での滞在時間は4時間程度だったが、平成22年度から秋の墓参事業は平和祈念会館で1泊できる宿泊墓参になり、故郷で少しでもゆっくりしたいという島民の願いに応えるものとなっている。

暮らしの痕跡を探して…

硫黄島墓参事業レポート

2009年実施 川島フサ子さんの場合

「来るのは大変だよ、でも兄貴が二人、待ってるでしょ」と話す川島フサ子さん。

軍属として硫黄島に残り、命を落とした兄は20歳と18歳だった。長男は貨物廠の壕に、二男は204設営隊の釜場にいたという。どこでどのように命を落としたか、家族の最期が分からない人も少なくないなか、川島さんの場合は戦後、長い時間はかかったが、なんとか判明した。「自分の体が元気なうちは」と十数年、硫黄島への墓参を続けている。

だが、1年ぶりに訪れると毎回悩まされるのが、うっそうと茂る木々。川島さんの孫が用意してきたナタで叩き切るようにして枝葉を払い、道を開いていく。「最初に来た時は、家の跡を見つけるだけで



川島フサ子さん／1929(昭和4)年生まれ。両親と9人の兄弟姉妹で硫黄島で暮らしていたが、1944(昭和19)年に疎開。疎開後は栃木県の開拓団に入った。



←夫の川島恒夫さんも同行。6月とはいえ、30℃を軽く超える気温は、参加者を悩ませる
↑硫黄島先祖供養塔の前で祈る川島さん
←1年経つと草木が屋敷跡を覆い隠してしまう。花を供えた後、一家総出で屋敷跡の手入れをする



何時間もかかったけど」、十数回も通ううちに目星が付くようになった。

ジャングルを縫うように進み、やっとたどり着いた屋敷跡。「こっちにタイル貼りの流しがあってね。ここらへんが薪置き場だったんだよ」。川島さんの視線の先には、自分が15歳まで暮らした当時の様子が、ありありと見えているようだった。

川島さんは言う。「娘や孫に硫黄島の話をするのは、お参りに来てほしいから」。その言葉の通り、親子孫3代で毎年、硫黄島墓参事業に参加する川島さん一家。こうして次世代、未来へと硫黄島の記憶が繋がっていくのだろう。

2015年実施 須永國男さんの場合

「たぶんこの辺りなんだよ」。妻、玲子さんと一緒に島内地図をにらみつつ、須永國男さんはつぶやく。

墓参事業に参加する旧島民を悩ませるのが、自分の家へ帰りたくても、その痕跡が残っていない、もしくは見つけづらいという状況だ。米軍との戦闘によって、硫黄島は地形が変わるほどの爆撃を受け、焼き払われてしまった。

さらに屋敷跡の発見をはばむのが、伸び放題になっている木々だ。家屋の基礎・土台や水を溜めていたタンクの跡など、家があった目安になるものを探そうとしても、まるでジャングルのように生い茂る木々がそれらを隠してしまう。

「以前来た時にだいたいの目星は付けた



←やっと見つけた自宅跡で山下賢二さんと一緒に記念撮影
✓また訪れた時、「もう迷わないように」と屋敷跡から舗装道路までのあちらこちらに目印のテープを巻いておく
↓硫黄島を船が離れる時、船上から献花をする須永夫妻



須永國男さん／1942年生まれ。自身は硫黄島で暮らした経験はないが、祖父の山下澄作さんと幼少時の母が暮らしたのが硫黄島。妻の玲子さんと墓参に参加。

んだけど、どうも確信が持てなくてね」と須永さん。そんな須永さんが頼りにしたのが、伯父の山下賢二さん。これまで同じ年に墓参事業へ参加することがなかったが、この年は山下さんも同じく参加している。今回、須永さんにとっては自分よりも年上で、戦前の様子を覚えている山下さんに祖父と母が暮らした場所を教えてもらう絶好の機会なのだ。

「こっちかな」。「いや、もっとこっちの方角だ」。道なき草藪のなかを行ったり来たりしながら、「うん！ ここだな」と山下さんが言う。手がかりは小さな、けれどきちんと平らに成型された石。「ここに柱が立ってたんだろうな」。

こうして須永さんが実家を探しあてたのは戦争が終わってから70年もの歳月を経た2015(平成27)年のことだった。

硫黄島の未来

二度とあってはならない悲劇 その記憶を後世に伝えるために

「帰島困難」との判断 島民は故郷へ帰れない

1968(昭和43)年、施政権を返還された小笠原諸島。父島、母島への居住は認められたものの、硫黄列島への帰島は許可されなかった。硫黄島島民は1969(昭和44)年には硫黄島帰島促進協議会を結成し、日本政府や東京都に対して帰島と再居住を求める活動を始めるが、1970(昭和45)年8月に決定した小笠原諸島復興計画で、「帰島および復興計画の対象は、当面父島および母島とし、硫黄島については、不発弾の処理および遺骨収集の状況との問題において復興の方途を検討する」こととされ、復興事業の対象から除外される。

また1984(昭和59)年5月には小笠原諸島振興審議会が火山活動、産業の成立条件が困難、戦没者の遺骨残存、不発弾の存在などを理由に「硫黄島での一般住民の居住は困難である」との答申を出した。

硫黄島島民の暮らしを 後世に伝えていく

戦後70年を経ても、いまだ硫黄島には帰還・再居住できる見込みはない。

かつて硫黄島で人々が平和に暮らしていたことが忘れ去られないよう、そして二度とあのような悲劇が繰り返されないよう、1995(平成7)年に出された小笠原村の宣言をここに挙げておきたい。

小笠原村平和都市宣言

平和で豊かな自然の中で暮らす我々小笠原村民は、世界中の人々が平和を分かちあえることを願う。

この願いは、小笠原の生い立ちが物語っている。

我々の先人が築いた文化を、歴史的に分断した強制疎開。

今なお一般住民の帰島が許されず、遺骨収集もままならぬ玉砕の地硫黄島。

このような地小笠原に生きる者として、戦後50年を迎えるにあたり、

不戦と恒久平和を誓い、豊かな自然を後世に残すために、

小笠原村が平和都市であり、またその使命を全うすることを宣言する。

平成7年8月15日
小笠原村

故郷の廃家

作詞：犬童球深 原曲：ウィリアム・ヘイス『My Dear Old Sunny Home』

幾年ふるさと 来てみれば
咲く花 鳴く鳥 そよぐ風
門辺の小川の ささやきも
なれにし昔に 変らねど
あれたる我家に
住む人絶えてなく

昔を語るか そよぐ風
昔をうつすか 澄める水
朝夕かたみに 手をとりにて
遊びし友人 いまいずこ
さびしき故郷や
さびしき我家や

「故郷の廃家」とは

硫黄島での戦いが激しさを増すなか、空襲がやみ、避難していた少年兵たちが壕から顔を出すと、真っ赤な夕日が見えた。その夕日を眺めながら故郷の両親、家族を思い出した一人がこの唱歌を歌いだし、さらに一人が歌に加わり、ついには多くの少年による大合唱に。それを陰で聞いていた市丸利之助少将が「15~16歳のこの子らを道連れにする忍びがたさに涙を浮かべた」という。

このエピソードはのちに島民へと伝わり、硫黄島募参事業や「硫黄島島民の集い」などの際、犠牲者への慰霊の気持ちを込めて人々に歌われている。

硫黄島歴史年表

西暦	和暦	硫黄島のできごと	日本のできごと
1543	天文12	●スペインの戦艦サン・ファン・デ・レトラン号(船長ベルナルド・デ・ラ・トーレ)によって硫黄列島が発見された	●鉄砲伝来
1779	安永8	●イギリスの艦隊が硫黄列島を目撃。硫黄列島の3島をノース・アイランド、サルファー・アイランド、サウス・アイランドと命名	
1853	嘉永6		●ペリー来航
1867	慶応3		●大政奉還 ●王政復古の大号令
1868	慶応4 明治元		●五箇条の御誓文
1869	明治2		●太政官制 ●版籍奉還
1871	明治4		●廃藩置県
1873	明治6	●小笠原の領土所属をめぐる日英米間で論争がさかんに。明治政府は小笠原を領有統治する方針を固める	●徴兵令 ●地租改正
1874	明治7		●民撰議院設立建白書
1875	明治8	●外務省官吏田辺太一等の調査団が父島・母島に派遣され、小笠原の住民に対して日本の所属となることを宣言	●樺太・千島交換条約締結
1876	明治9	●3月、小笠原を内務省所管とする ●10月、諸外国に小笠原が日本領土と通告し、日本領土と確定	●廃刀令
1877	明治10		●西南戦争
1881	明治14		●国会開設の勅諭(明治十四年の政変)
1887	明治20	●11月1日、高崎五六東京府知事が灯台巡視船・明治丸で横浜港を出帆、三宅・八丈・小笠原諸島を巡回 ●11月10日、硫黄島を探査	
1889	明治22	●6月、田中栄二郎が硫黄島へ渡航。北硫黄島にも寄る ●8月3日、南硫黄島で4年間生活していた遭難者発見 ●12月、小笠原島庁荒川義邦が硫黄島調査	●大日本帝国憲法の発布
1890	明治23	●小美田利蔵が硫黄試掘願を農商務大臣に提出	●教育勅語の発布 ●第一回帝國議會
1891	明治24	●9月9日、勅令をもって硫黄列島が東京府小笠原島庁管轄となる。北硫黄島、硫黄島、南硫黄島と名称を定めた ●11月、小笠原島庁の公標が硫黄島に建つ	
1892	明治25	●5月16日、硫黄鉾山試掘願いが農商務大臣によって許可された	
1894	明治27		●日清戦争(～1895)
1895	明治28		●下関条約→三国干渉
1896	明治29	●石野平之丞が北硫黄島に上陸	
1898	明治31	●硫黄島からの輸出入・運送用に鯨漁船・小廻船2艘と年2回の定期船便を利用。そのうちの1回を南硫黄島まで迂回させ、遭難者の有無を確認することに	
1899	明治32	●石野平之丞が母島から北硫黄島に移住、開拓を開始	
1902	明治35	●北硫黄島に私設小学校が開校	●日英同盟
1903	明治36	●硫黄採掘一時停止	
1904	明治37	●7月、北硫黄島の私設小学校が石野村尋常小学校として認可 ●小笠原島庁が吏員による島内の面積を実測(1904・1907・1910年)	●日露戦争(～1905)
1906	明治39	●東忠三郎が仮校舎を硫黄島西海岸近くに建て私設小学校が開校	
1907	明治40	●内地から定期航路が年6回、硫黄島と北硫黄島に寄港するように	
1910	明治43	●警視庁は硫黄島に巡査在勤所を設置、巡査1名を配置	●ポーツマス条約
1911	明治44	●在郷軍人分会と硫黄島青年団が結成される	●日韓併合

1912	明治45 大正元	●8月12日、東京地学協会伊豆南方諸島学術調査団が硫黄島を調査 ●12月9日、久保田拓殖合資会社設立	●関税自主権を回復(条約改正の達成)
1913	大正2	●6月15日、大正尋常小学校が開校	
1914	大正3	●世話掛が置かれる。初代世話掛に島庁第一課長の尾崎登代田赴任。助役収入役青木千蔵就任	●護憲運動が起こる
1915	大正4	●大正尋常小学校に実業補習学校が併設される	●第一次世界大戦に参戦
1918	大正7	●北硫黄島青年会が結成される ●2月6日、大正尋常小学校に高等科併設の申請書提出 ●7月15日、高等科併置認可。東京府小笠原島大正尋常高等小学校設立 ●10月3日、処女会(女子青年団の前身)創設。育英規定の設立	●中国に21か条の要求を出す
1919	大正8	●久保田宗三郎が開拓と島民安定の功績により東京府より表彰される ●久保田拓殖合資会社は地熱利用による製塩業を本格的に開始	
1920	大正9	●久保田拓殖合資会社は株式会社に組織変更。硫黄島拓殖製糖株式会社となり、製糖事業を本格化	●米騒動 ●シベリア出兵(～1922) ●原敬内閣成立
1922	大正11	●南海岸までの道路の整備、南海岸の施設整備を行う ●6月24日、安宅吉次郎校長により「御真影御下賜願」島庁経由、府知事あて稟請書提出 ●8月15日、小学校に御真影設置	●常任理事国として国際連盟に加盟
1925	大正14	●大正尋常高等小学校校舎増改築および屋根葺替え	●関東大震災
1926	大正15 昭和元	●6月、大正小学校が徴兵署として使用され始める ●6月30日、大正実業補習学校学則一部改正し、名称を大正農業補習学校と変更	
1928	昭和3	●御大典奉祝記念行事が行われる ●コカの乾燥場完成	
1929	昭和4	●分教場新築	
1930	昭和5	●コカ栽培事業が順調で、大倉庫・事業部事務所を建設	
1931	昭和6	●蓄電池による学校ラジオ受信機を設備。ラジオ塔が設置される ●学校職員による日刊島内新聞がスタート	●治安維持法
1932	昭和7	●小作人組合が結成され、小作争議が起こる ●青年訓練所で教練実施	●満洲事変
1933	昭和8	●学校にミシンを購入し洋服を製作 ●海軍戦闘機飛行場(南北800m、東西200m)千島が原に仮設 ●レモンガラスオイル生産が開始され、元山噴気口附近に工場建設 ●再度小作争議。硫黄島拓殖製糖会社に対して小作人が待遇改善要求	●満洲国建国宣言 ●5・15事件
1934	昭和9	●レモンガラスオイル生産活動が活発化し、輸送用トラック3台が稼働 ●内地への教育視察	
1935	昭和10	●農業補習学校と青年訓練所が合併し、青年学校が設置・発足	
1936	昭和11	●青年学校兵器倉庫兼家庭科実習室建設 ●硫黄島拓殖製糖株式会社の名称が硫黄島産業株式会社に改められる	●国際連盟を脱退
1937	昭和12	●海軍飛行場増設 ●模写写真撮影等が禁止される	●2・26事件
1938	昭和13		●日中戦争(～1945)
1939	昭和14	●中央气象台硫黄島観測所が開設される ●愛国婦人会分区創設。会員165名により出征軍人家族援護の事業活動を行う	
1940	昭和15	●3月、硫黄島観測所無線局が硫黄島公衆無線電報取扱所になり、電報が使用可能に。郵便局開設 ●4月1日、硫黄島に町村制が適用され硫黄島村となる。北硫黄島は東京府小笠原支庁直轄が継続	

1940	昭和15	●第一飛行場建設開始。労務者約2,000名就労 ●小笠原食品株式会社が設立し、労務者対象にする粉、まんじゅう、だんごなどを販売	
1941	昭和16	●小学校制度廃止され、学校名称を硫黄島村大正国民学校と改める ●大正国民学校教育簿に教育信条明記	●日ソ中立条約 ●日独伊三国同盟 ●大政翼賛会 ●12月8日、真珠湾攻撃
1942	昭和17	●和智恒蔵海軍中佐が1,000名以上の警備隊引率上陸。 小笠原食品株式会社はこの部隊に野菜を納入 ●軍部は島内民家に分宿を始める	●ミッドウェー海戦 ●ガダルカナル島戦
1943	昭和18	●小笠原で零戦機献納金運動が起きる。硫黄島民も献金運動に合同 ●7月1日、東京都小笠原島硫黄島村大正国民学校と校名変更 ●9月、父島方面特別根拠地隊の一部230名上陸。 横須賀鎮守府派遣隊員800名上陸 ●飛行場滑走路1,200m x 200m完成。 海軍一式陸攻(双発爆撃機)の離着陸が可能になる	●アッツ島沖敗戦
1944	昭和19	●2月、海軍機が監獄岩に不時着 ●3月、海軍硫黄島警備隊新設(和智恒蔵海軍中佐司令以下39名)。 父島の小笠原地区兵団から陸軍部隊が硫黄島に進出し、伊支隊として発足(厚地兼彦大佐以下4,883名) ●4月、学校校庭が軍用物資の集積所に ●5月、米軍機来襲し、硫黄島神社附近爆撃 ●6月8日、小笠原諸島所在部隊を改編し第109師団編成。栗林忠道中将着任 ●6月15日、初めて艦載機の空襲を受ける ●6月16日、約100機の爆撃機来襲し、全島被害。 軍部から学校閉鎖の要請および学童の疎開勧告 ●7月1日、軍部から疎開命令 ●7月3日、硫黄島から村民第1陣疎開 ●7月7日、硫黄島から村民第2陣疎開 ●7月14日、硫黄島から村民第3陣疎開	●マリアナ沖海戦、サイパン島、グアム島敗戦 ●10月フィリピン・レイテ島にて特攻戦
1945	昭和20	●2月16日、米軍上陸。戦闘開始 ●3月21日、日本の大本営が硫黄島守備隊の玉砕を発表	●東京大空襲 ●沖繩戦 ●ボツダム宣言 ●広島・長崎に原子爆弾投下 ●第二次世界大戦終結
1946	昭和21	●1月29日、行政権分離に関する覚書により、父島・母島などとともに関連軍施政権下に入る	●日本国憲法の公布
1947	昭和22		●日本国憲法施行
1951	昭和26	●対日平和条約(サンフランシスコ講和条約)調印	●対日平和条約・日米安全保障条約調印
1952	昭和27	●対日平和条約が発効し、米国の施政権下に ●第1回遺骨調査・収容	
1964	昭和39		●東京オリンピック
1965	昭和40	●東京都による硫黄島墓参事業開始	
1968	昭和43	●6月26日、硫黄列島を含む小笠原諸島の施政権が日本に返還。 小笠原村設置、東京都小笠原支庁の所管となる ●自衛隊による飛行場の運用開始。海上自衛隊硫黄島航空基地分遣隊を設置	
1969	昭和44	●1月、硫黄島帰島促進協議会結成	
1970	昭和45	●8月、小笠原諸島復興計画決定「帰島および復興計画の対象は、当面父島および母島とし、硫黄島については、不発弾の処理および遺骨収集の状況との問題において復興の方途を検討する」こととし、復興事業の対象から除外される(以降継続)	

1972	昭和47	●南硫黄島が国の天然記念物(天然保護区域)に指定される	●札幌オリンピック ●沖縄の施政権返還 ●日中国交正常化
1973	昭和48		●オイルショック
1975	昭和50	●南硫黄島が日本初の原生自然環境保全地域に指定される	
1978	昭和53		●日中平和友好条約
1982	昭和57	●環境庁が南硫黄島を調査	
1984	昭和59	●5月31日、小笠原諸島振興審議会は「硫黄島は火山活動による異常現象が激しい上、産業の成立条件も厳しく、一般住民の定住は困難」との答申を出す ●6月、小笠原諸島振興計画(改定10箇年計画)の決定「硫黄島および北硫黄島については、一般住民の定住は困難であると考えざるを得ないことに鑑み、旧島民に報いるための措置および集団移転事業に類する措置を講ずるものとする」 ●12月、小笠原諸島振興審議会の意見具申「旧島民に報いるための措置の具体化として、総額5億6,200万円の見舞金を支給すること」	
1985	昭和60	●2月19日、日米双方の元軍人・退役軍人ら400名による合同慰霊祭	●日航機墜落事故
1986	昭和61	●3月、見舞金の支給事務終了	
1989	昭和64 平成元		●消費税(3%)開始
1990	平成2	●11月9日、戦前の島民墓地跡に建設を進めてきた硫黄島旧島民平和祈念墓地公園の竣工式典が行われる	
1991	平成3	●2月12日、天皇、皇后が硫黄島を訪問される ●3月、硫黄島開拓之碑(小笠原村)および硫黄島旧島民戦没者の碑(旧島民有志)建立 ●7月、北硫黄島で石野遺跡が発見される	
1994	平成6	●米沿岸警備隊のロランC基地撤去	
1995	平成7		●PKO協力法成立
1996	平成8	●6月21日、行幸啓記念碑除幕式挙行	
1997	平成9	●6月、小笠原村により、おがさわら丸を利用した硫黄島訪島事業(墓参)が開始	
1998	平成10		●長野オリンピック
2001	平成13		●阪神・淡路大震災
2002	平成14	●6月21日、小笠原村が硫黄島平和祈念会館を建設。 墓参や遺骨収容などで訪島した人の宿泊施設として開所	
2005	平成17	●6月19日、小泉純一郎内閣総理大臣が現職首相として初めて硫黄島を訪問、戦没者追悼式に出席	●テロ対策特別法案成立 ●京都議定書発効
2007	平成19	●6月17~27日、東京都と首都大学東京が合同で南硫黄島の自然環境調査を実施 ●6月18日、地名等の統一に関する連絡協議会(国土地理院と海上保安庁海洋部で構成)において、硫黄島の読みが「いおうじま」から「いおうとう」に変更され、あわせて北硫黄島は「きたいおうとう」、南硫黄島は「みなみいおうとう」にそれぞれ変更	
2010	平成22	●8月10日、菅直人内閣総理大臣の下に、硫黄島の遺骨帰還に関する特命チームが発足	
2011	平成23	●6月、「小笠原諸島」がユネスコの世界自然遺産に登録される	●東日本大震災
2013	平成25	●4月14日、安倍晋三内閣総理大臣が硫黄島で開催された戦没者追悼式に出席	
2014	平成26	●国土地理院による調査で、硫黄島の面積が父島を抜いて小笠原諸島最大になっていることが判明	
2015	平成27	●3月21日、日米合同慰霊追悼式が硫黄島協会と米国退役軍人らの団体の共催で行われる	

発刊に寄せて

全国硫黄島島民の会 会長

寒川 藏雄

太平洋にぽっかり浮かんだ小さな小さな島、硫黄島に開拓者が入ったのは明治22年。私たちの祖先は南国のパラダイスを作り上げました。しかし、先の大戦において島民は強制疎開を余儀なくされ、戦後70年が経過した現在も、島民が住むことが許されていません。

我々、旧島民・旧島民二世・三世は、この島の歴史を後世に残し、広く日本国民に知っていただきたいとの願いから、書籍制作を長い間考えてきました。今ここに、島民の悲願でありました本書を発刊できますことは喜びに堪えません。旧島民一世の方々への熱い思いを詰め込みました。

これもひとえに小笠原村の厚いご理解と多大なるご援助によります。そして、小笠原協会のご協力にも感謝いたします。

硫黄島同窓会から始まり、現在の全国硫黄島島民の会にいたるまで、毎年いろいろと企画、運動をしてまいりました中、我々を陰から支えて下さり、全ての実現

に力をいただいた菊池滋夫様(前東京都漁業協同組合連合会会長)には、この場をお借りしまして感謝申し上げます。

旧島民の皆さまにおかれましても、ご健勝をお祈り申し上げます。今後とも倍旧のご厚情を賜りますよう、お願い申し上げます。



謝辞

「帰れぬ故郷」への思いを抱く硫黄島島民同士が集まり、「同窓会」として始まった全国硫黄島島民の会。強制疎開後は散りぢりになってしまった島民たちが、年に一度だけ、川崎で再会する機会を作り続けてきました。

そうした機会を重ねて44回。2014年の総会にて、硫黄島で暮らした日々、そこに暮らした人々の記憶、思いを残しておきたいという硫黄島島民の気持ちを改めて確認し、また、小笠原村役場様からのあたたかな支援も受け、この書籍を発行することができました。何よりも本書発行のために、浄財を寄付していただいた皆様。皆様の存在がなければ、本書の発行はありませんでした。改めて深く、心よりの感謝をお伝えいたします。

また、ご多忙の中、インタビューに応じていただいた皆様に深い感謝の気持ちを表します。そして本書中でご紹介しきれなかったものの、以下の皆様にも大変なご協力をいただきましたこと、この場を借りて感謝させていただきます。

硫黄島島民、またその子孫の方々

硫黄島協会

公益財団法人小笠原協会

今後も全国硫黄島島民の会は、硫黄島での暮らしを後世に伝えるべく、写真・関係資料の保存、関係者へのインタビュー取材などを継続していきます。たった1枚の写真でも、ほんの少しの思い出話でも、硫黄島にかつて人々が暮らし、確かに生活があったことを証明し、語り継いでいく基礎となります。今後ともご協力をお願い申し上げます。

本書中のイラストおよびイラストマップはカネコマサアキ様、広域マップは地図屋もりそん様、装丁・デザイン・編集はCOSMIK*様によります。深く感謝申し上げます。

また、監修のみならずインタビュー内容を共有して下さった石原俊先生、文献・資料整理をお手伝いいただいた長谷川光子様、そして最初の取材から本書執筆までの約7年間を支えてくれた夏井坂家の皆様にも、多大なる感謝を述べさせていただきます。

夏井坂聡子

※本書中で各章を「戦前・戦中・戦後」と便宜上、区分して表記していますが、硫黄島の島民にとっては現在も自由に「故郷に帰れない」状況下であり、真の意味での「戦後」は訪れていないと考える島民が多いことをご理解いただければ幸いです。

主要参考文献・資料

- 青野正男『小笠原物語』『小笠原物語』編纂室 1978年
浅沼秀吉・編『硫黄島——その知られざる犠牲の歴史』硫黄島産業株式会社被害者擁護連盟 1964年
硫黄島遺骨収集記録誌編集委員会・編『硫黄島遺骨収集記録誌』小笠原村 1999年
硫黄島戦前史発行会・編『硫黄島同窓会会報 5号』1984年
石原 俊『〈群島〉の歴史社会学——小笠原諸島・硫黄島、日本・アメリカ、そして太平洋世界』弘文堂 2013年
——『解除されない強制疎開——「戦後70年」の硫黄島旧島民』『現代思想』43巻12号 青土社 2015年
エルドリッチ、ロバート・D.『硫黄島と小笠原をめぐる日米関係』南方新社 2008年
小笠原協会・編『小笠原』48号 2003年
——『小笠原』59号 2014年
——『小笠原』60号 2015年
小笠原村『硫黄島——硫黄島島民平和祈念墓地公園開設15周年記念』2000年
梯久美子『散るぞ悲しき——硫黄島総指揮官・栗林忠道』新潮社（新潮文庫）2008年
栗林忠道・著／吉田津由子・編『玉砕総指揮官』の絵手紙』小学館（小学館文庫）2002年
厚生労働省『政策レポート（硫黄島からの遺骨帰還について）』2011年
<http://www.mhlw.go.jp/seisaku/2011/04/01.html>
国土交通省都市地域整備局／日本交通公社『平成17年度 小笠原諸島の自立的発展に向けた歴史・文化探訪観光開発基礎調査報告書』国土交通省都市・地域整備局特別振興官 2006年
辻友衛『小笠原諸島歴史日記——小笠原を知るには歴史を探ろう上・中・下』近代文藝社 1995年
東京都教育委員会『東京都埋蔵文化財調査報告第19集：小笠原諸島の考古学的資料集成』東京都教育庁生涯学習部文化課 1992年
徳永保／神代浩／北風幸一／淵上孝『我が国の学校教育制度の歴史について』国立教育政策研究所 2012年
https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/pdf/kenkyu_01.pdf
都市調査会・編『硫黄島関係既存資料等収集・整理調査報告書』1982年
中村栄寿／硫黄島戦前史刊行会・編『硫黄島同窓会会報 3号：硫黄島——村は消えた、戦前の歴史をたどる』1983年
真崎翔『米国の核戦略に組み込まれた小笠原諸島』『同志社アメリカ研究』50号 同志社大学アメリカ研究所 2014年
ロング、ダニエル・編『小笠原学ことはじめ』南方新社 2002年
山下達美『硫黄島 我が故郷』2012年

※「島民の声を聞く」ページについて

P34・35、P40・41、P44・45、P52・53、P80・81は小笠原協会・編『小笠原』59号、60号の内容と弊会独自インタビューにより構成。P56は石原俊氏インタビューにより構成。P72・73は石原俊氏・弊会の共同インタビューにより構成。

いおうとう 硫黄島クロニクル～島民の運命～ さだめ

2016年3月31日発行 第1刷

発行者 寒川藏雄
著者 夏井坂 聡子
監修 石原 俊
発行所 全国硫黄島島民の会

東京都世田谷区南烏山3-2-10 後藤ビル206 〒157-0062
TEL 090-3472-5555



落丁、乱丁本はお手数ですが、弊会事務局までお送りください。
送料弊会負担でお取替えいたします。

装丁・デザイン／COSMIK* 宮田舞子 写真／渡邊英昭
印刷・製本／株式会社我龍社

IWO-TO ISLAND CHRONICLE
by The National Association of Iwo-to Islanders
Copyright © 2016 The National Association of Iwo-to Islanders

